



第2回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会 「ESDで育てる“生きる力”」

抄録集

開催日: 平成22年10月30日(土)
会 場: 国立大学法人宮城教育大学

第2回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会

抄 録 集

平成22年10月30日(土)

国立大学法人宮城教育大学

主催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会

共催：(国)宮城教育大学、(特)日本持続発展教育推進フォーラム
(財)ユネスコ・アジア文化センター、(社)日本ユネスコ協会連盟

後援：外務省、環境省、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会
全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会
全国国公立幼稚園長会、宮城県小中高校校長会 仙台市小中学校長協会
国立大学附属学校連盟、国立大学協会、日本教育大学協会
日本私立大学協会、日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会
日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、日本PTA全国協議会
教育新聞社

目 次

◆開催によせて

文部科学大臣 高木 義明	3
日本ユネスコ国内委員会会長 田村 哲夫	4
ユネスコ日本政府代表部特命全権大使 木曾 功	5
国立大学法人宮城教育大学長・ASPUnivNet代表 高橋 孝助	6

◆大会日程	7
-------	---

◆会場案内	8
-------	---

◆シンポジウムⅠ	10
----------	----

東京国立博物館長・元文部科学事務次官 銭谷 眞美

◆シンポジウムⅡ	12
----------	----

国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部長 角屋 重樹

石川県金沢市教育委員会教育長 浅香 久美子

宮城県気仙沼市大谷小学校長 藤村 俊美

広島県立広島中学校・広島高等学校高校教頭 藤本 秀穂

◆実践報告

幼稚園	16
小学校	17
中学校	34
高等学校	42
中高一貫校	54
大学	56
その他	57

◆ランチョンセッション（企業による社会貢献活動紹介）	58
----------------------------	----

◆ユネスコスクール一覧	62
-------------	----

◆持続発展教育(ESD)大賞について	64
--------------------	----

第2回 ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会開催に寄せて



文部科学大臣 高木 義明

昨年に引き続き、第2回ユネスコスクール全国大会が開催できますことを関係者の皆様方に感謝申し上げます。

本年度のユネスコスクール全国大会は、世界の民間ユネスコ活動の発祥の地である仙台で開催されるということで、ここ数年の国内におけるユネスコ活動の高まりを、今一度ユネスコ活動の原点に戻って確認できるよい機会となるのではないかと思います。

2002年の第52回国連総会において、我が国が提唱し、多くの国々の賛同を得て始まった「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」(DESD、2005-2014)は、すでに後半を迎えています。2014年のDESD最終会合も日本で開催することが決定し、国際的にもESDへの日本の取組・貢献はこれまで以上に注目を集めているところです。

このような中、我が国では近年、とりわけ国内におけるESD取組の推進を重視し、ESDの普及促進のための方策について検討を重ねてまいりました。そして、その一つの有効な手段として、ユネスコの国際的な学校間ネットワークである「ユネスコスクール」を活用することを提言いたしました。我が国のユネスコスクール加盟校は本年10月現在で207校を数えておりますが、DESDが始まった2005年のユネスコスクール加盟校数が19校であったことを考えますと、この著しい増加数には隔世の感がございます。

ESDの普及促進、そして何よりESD概念の定着は、決して数の論理では語れないところではありますが、我が国のユネスコスクールは、ユネスコの理念のもとにESDのテーマである環境教育、国際理解教育、世界遺産教育等の個々の分野の取組をつなぐとともに、国際的なネットワークを構築することを通じて、持続発展教育の推進拠点校としての役割を十分に果たしていると考えております。

今回の第2回ユネスコスクール全国大会では、ESDの実践により、児童・生徒に、どのような力が身につくのか実践の成果や評価について議論することを目的としています。ESDは将来にわたって持続可能な社会を構築するために問題意識を持ち、人と意見を交わし、ともにあるべき方向に向かって行動する人材を育てる教育です。ESDが新学習指導要領下で最大の目的としている「生きる力」の育成にどのような役割を果たしていくことができるのか、本日お集まりの皆様方とともに考えていければと思います。



日本ユネスコ国内委員会 会長 田村 哲夫

皆様もご承知の通り、2002年の第57回国連総会にて我が国が世界に提案した「国連E S Dの10年」は、私たち人類の未来を賭けた教育のイニシアチブとして、ユネスコがその主導機関となり世界的な取組みを進めているところです。

日本ユネスコ国内委員会では、我が国におけるユネスコ活動に関する助言、企画、連絡及び調査を行う機関として、これまでにいくつかの提言・建議を関係大臣に提出し、日本におけるユネスコ活動、とりわけESDの振興に努めてまいりました。

2008年2月には、ESDの学校現場への普及促進を図ることを目的に、持続発展教育の名称使用や、ユネスコスクールの活用・発展等を提言しており、また、2009年3月には、学校教育におけるESDの推進やユネスコスクール活動への支援を求める建議を文部科学大臣等の関係大臣に提出しております。新しい学習指導要領にはESDの概念が明確に盛り込まれ、我が国の教育の重要な理念の一つとしてESDは位置づけられております。

また、我が国において2014年に国連ESDの10年の最終会合をユネスコと共に開催することが予定されており、国際社会においても日本のESDへの注目が高まっているところであります。ESD提唱国である我が国では、教育現場のみならず、地域社会、企業、NPO等多くの主体によりESD活動が行われており、その成果は2014年の最終会合にむけて集大成されていくべきものと考えております。

ユネスコスクールでE S Dを実践するということは、すなわち世界に向けて自分たちの活動を発信するということにつながります。日本ユネスコ国内委員会としましても、ESDの10年の後半を盛り上げていきたいと思っておりますので、皆様方のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、本大会に参加された皆様方にとり実り多いものとなりますよう祈念するとともに、引き続きユネスコ活動の推進とESDの普及にお力添えをお願い申し上げ、私のご挨拶に代えさせていただきます。



ユネスコ日本政府代表部特命全権大使 木曾 功

第2回ユネスコスクール全国大会が開催されるに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

近年、日本国内のユネスコスクール数は飛躍的に増加しています。2008年当初日本国内に20数校しかなかったのが、2010年8月現在では、207校の幼稚園・小・中・高等学校及び教員養成学校がユネスコスクールとなっております。現在、500校の加盟校を目標としつつ、一層の推進のための取り組みが進められています。ユネスコスクールの加盟申請書は、私の在職しているユネスコ日本政府代表部を経由してユネスコ事務局に提出されますが、近年ユネスコへの加盟申請が増加していることは、大変喜ばしいことです。

一方、ユネスコスクールは、その数が増えることも重要ですが、日本国内のユネスコスクールのネットワークや、海外のユネスコスクールとのネットワークを構築し、学校間の連携・交流を促進することにより、内容面の充実を図ることも重要であると考えます。

ご承知の通り、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会においては、ユネスコスクールを、「持続可能な発展のための教育（Education for Sustainable Development：ESD）」を普及させるための拠点と位置づけ、様々な取り組みを行っています。ユネスコにおいては、2005年から2014年までの「国連持続可能な発展のための教育（ESD）の10年」の後半5年の取り組みが開始されたところであり、現在、後半5年間におけるユネスコのESD戦略が策定されているところであり、ユネスコスクールもこの戦略の中に位置づけられています。日本は、従来もユネスコの総会や執行委員会等の会議の場において、ESDの推進に果たすユネスコスクールの重要性を主張してきました。

ESDの10年が始まった当初は、ESDは、ユネスコにおいて日本やドイツ等の一部の国しか関心を持たれなかったのですが、最近ではアフリカ等の開発途上国も含めた多くの国がその重要性を訴えるようになってきています。気候変動や生物多様性等、地球規模での取り組みが必要な喫緊の課題に直面している今日、一人一人の価値観や行動様式を変えるための手段として、ESDは極めて有効であり、今後益々重要性を増すものと思われます。

我が国の教育現場においては、環境、国際理解、多文化共生等、既にESDの内容を取り込んだ教育が既に多く取り入れられていることがわかります。世界全体で9000校近くあるユネスコスクールの中で、日本のユネスコスクールはESDに関する数多くの先進的な取り組みを実施しているところであり、これらの優れた取り組みを世界に普及することは、ESDを通じた地球規模の課題の解決への貢献につながる意義のあることだと考えております。

日本のユネスコスクールの今後のますますの発展を期待して、ご挨拶といたします。



国立大学法人宮城教育大学長 ASPUnivNet 代表 高橋 孝助

第2回ユネスコスクール全国大会のお世話をさせていただくことになりました、宮城教育大学として、そしてユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）の代表として一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、この第2回ユネスコスクール全国大会を宮城教育大学を会場として開催する栄誉を与えていただきました文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、そして、共催いたします、NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム、財団法人ユネスコ・アジア文化センター、社団法人日本ユネスコ協会連盟、はじめ全国大会の開催に様々な形でご協力いただきました多くの皆様に深く感謝を申し上げます。

ユネスコスクールは1953年、ASPnet（Associated Schools Project Network）として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するために発足しました。宮城教育大学附属小学校は、2007年に宮城県内で初めてユネスコスクールに認定され、2008年に本学自身も認定されました。

仙台は、世界のユネスコ運動発祥の地であり、また、宮城県はユネスコスクールに国内で最も多く加盟している県であります。この宮城県・仙台で、第2回ユネスコスクール全国大会が開催されますことは、日ごろユネスコスクールの普及活動に力を入れてまいりました宮城教育大学として大変嬉しいことです。

本日ご参加の皆様にとりまして、銭谷真美 東京国立博物館長・元文部科学事務次官による「ESDで育てる“生きる力”」と題した基調講演や、パネルディスカッションなどを通じて実りある大会としていただければ幸いです。

ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）は、全国を網羅するかたちで、現在、12大学等で構成しています。今後もユネスコスクール加盟校や加盟を検討しています学校を支援して参りますので、要望等ございましたら、ASPUnivNet事務局の宮城教育大学や各加盟大学等までお寄せ願います。

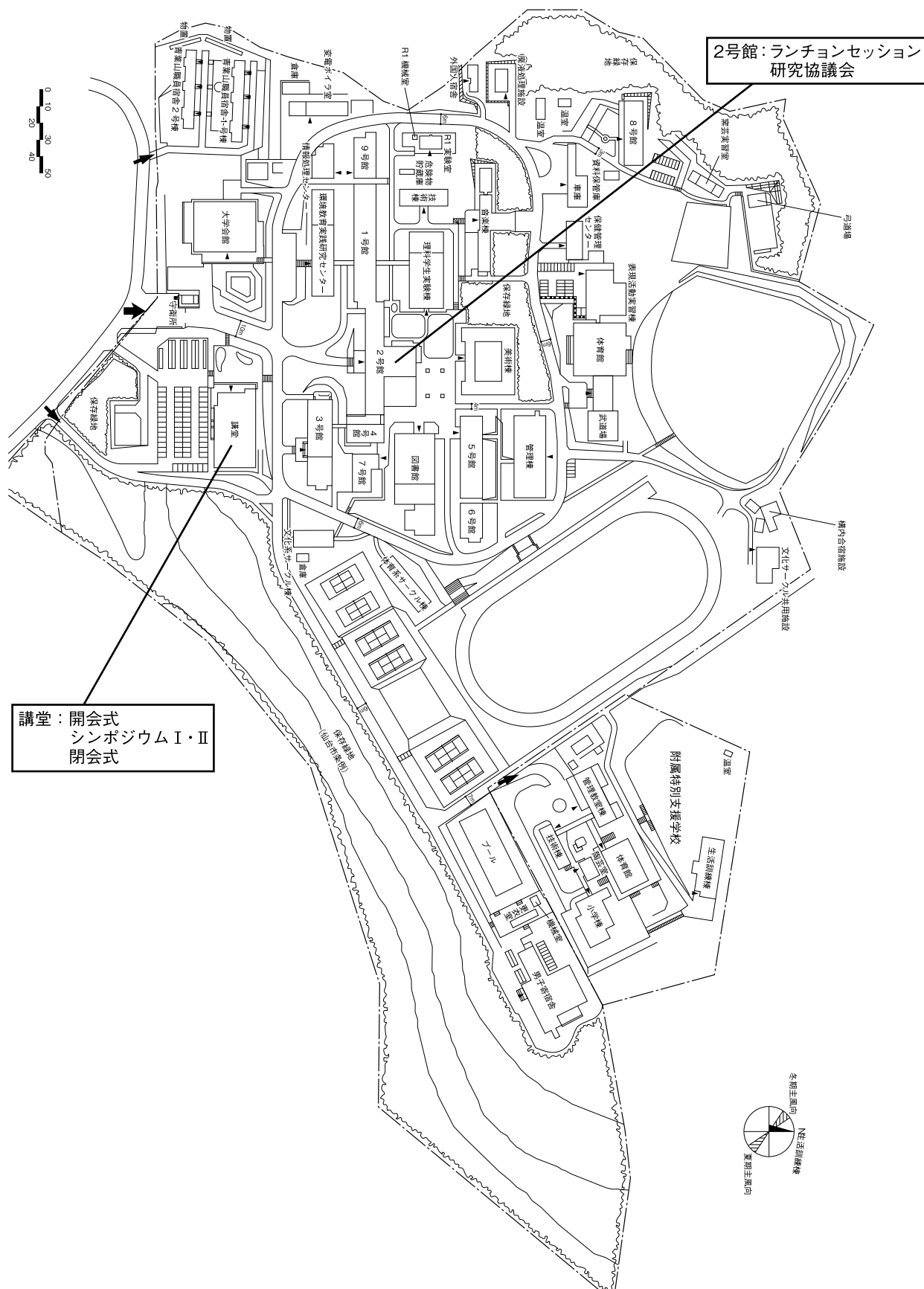
本日は、宮城教育大学の教職員スタッフも一生懸命サポートいたしますけれども、行き届かないことがあるかも知れません。その時はどうぞスタッフにお申し付け願います。

最後に、この第2回ユネスコスクール全国大会が成功裏に終わりますことを祈念申し上げて、私の開催の挨拶といたします。

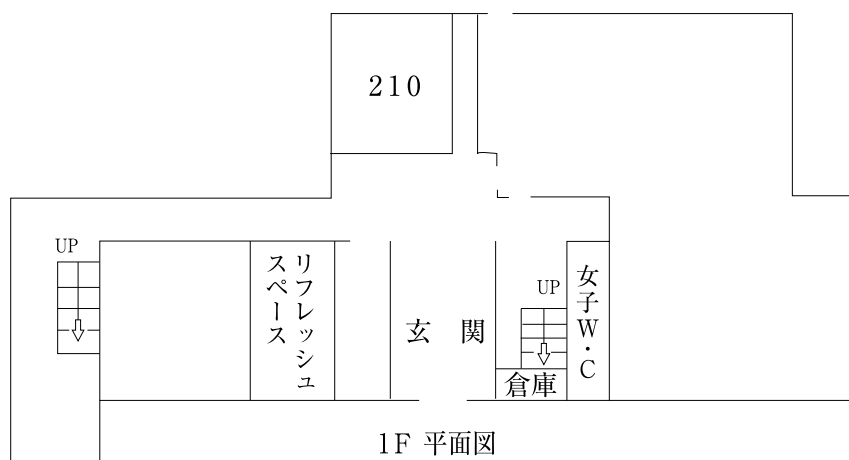
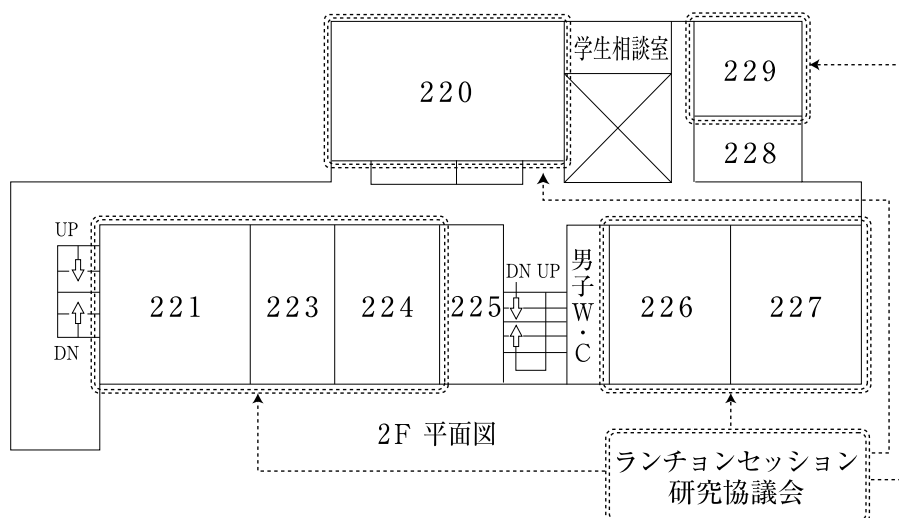
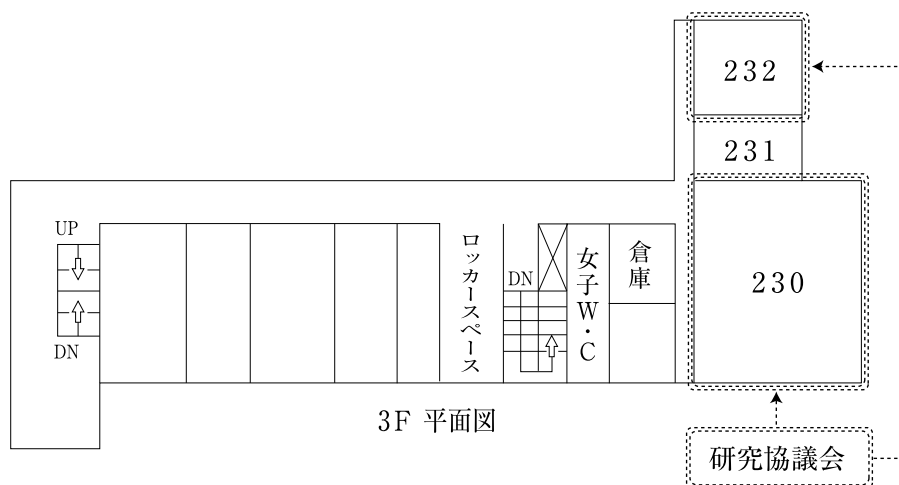
大会日程

時 間	プ ロ グ ラ ム	会 場
09:30～10:00	受付	
10:00～10:30	開会式	講 堂
10:40～11:30	シンポジウムⅠ 基調講演「ESDで育てる“生きる力”」 講演者：銭谷 眞美 東京国立博物館長 元文部科学事務次官	講 堂
11:40～12:30	ランチョンセッション 協力企業による社会貢献活動の活動の紹介(昼食付) カシオ計算機株式会社・サンウエーブリフォームショップR&B 積水ハウス株式会社・全国農業協同組合連合会・ソーケングループ ダノンウォーターズオブジャパン株式会社・P&Gジャパン株式会社	2号館 220、221 223、224 226、227 229
12:30～12:50	休憩 ※展示ブースにぜひお立ちよりください。	
12:50～14:50	研究協議会 テーマ「ユネスコスクールとしての実践を深めるために」 ユネスコスクール教職員による小グループでの課題別研究協議会 ①ESDの浸透 ②校内連携 ③教科とのリンク ④活動の継続性 ⑤環境整備 ⑥地域連携 ⑦学校間交流 ※③と⑥は2教室にわかれて行います。	2号館 220、221 223、224 226、227 229、230 232
15:00～16:30	シンポジウムⅡ パネルディスカッション「ESDで育てる“生きる力”」 司会： 市瀬 智紀 宮城教育大学教授 パネラー： 角屋 重樹 国立教育政策研究所基礎研究部長 浅香久美子 石川県金沢市教育委員会教育長 藤村 俊美 宮城県気仙沼市立大谷小学校長 藤本 秀穂 広島県立広島中学・高校 高校教頭	講 堂
16:30～17:00	閉会式・持続発展教育(ESD)大賞 表彰式	講 堂

会場案内



2号館(講義棟)



ランチョンセッション

カシオ計算機株式会社：220、サンウェーブリフォームショップR & B：221、
 積水ハウス株式会社：223、全国農業協同組合連合会：224、ソーケングループ：226、
 ダノンウォーターズオブジャパン株式会社：227、P&G ジャパン株式会社：229

研究協議会

①：230、②：232、③-1：221、③-2：223、④：224、⑤：229、⑥-1：226、⑥-2：227、⑦：220

「ESDで育てる“生きる力”」



東京国立博物館長 元文部科学事務次官 銭谷 眞美

はじめに

平成18年12月に教育基本法が60年ぶりに改正され、それを受けて平成19年6月に教育免許法、学校教育法などの教育三法の改正がされました。

私はそれらのいずれにも関わってきましたが、これによって教育というのは今大きく様変わりしている時期にあるということが言えると思います。

教育には2面性があり、一つは子どもたちあるいは教育を受ける側の能力を最大限に引き出す、伸ばすという、非常に個人にかかわる側面があります。もう一つの側面は、社会から見た場合には、家族の一員、社会の一員、国民、地球市民としての一人一人の個性を社会化する、つまり文化や伝統を継承して発展させるという側面があります。この二つのバランスをとりながら、知的な面、徳育の面、体育の面、知・徳・体のこの三つにわたって教育を行っていくというのが教育の基本的な考え方になります。

2. 持続発展教育（ESD）の概要

(1) 持続発展教育（ESD）について

ESDは持続可能な社会の担い手を育む教育です。言い換えれば持続可能な社会を構築するための人づくりといえるかもしれません。ESDの実施には特に次の二つの観点が必要とされています。

- ・ 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- ・ 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと

そのため、環境教育、国際理解教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別の分野にとどまらず、環境、経済、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要です。

(2) ユネスコスクールとESD

ユネスコスクールはユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校です。ユネスコスクールのテーマとESDのテーマは一致しております。文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会ではユネスコスクールをESDの推進拠点として位置づけております。今後、ユネスコスクールの加盟校数がさらに増加し、地域と一体となりESD活動が活発化することが期待されます。

新しい学習指導要領について

“生きる力”とは何か

現行の学習指導要領の理念である“生きる力”をはぐくむという理念は新しい学習指導要領にも引き継がれております。ここであげられている“生きる力”とは

- ・基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- ・自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性
- ・たくましく生きるための健康や体力

などを指しております。これらの力は、先にあげた知・徳・体を構成するものであります。知・徳・体の三つにわたって教育を行っていくという教育の基本的な考え方をうたっている教育基本法であり、その法律に基づいて学校教育では学校教育法という法律ができて、その学校教育法に基づいて学習指導要領ができております。

“生きる力”をはぐくむという理念を実現するために、“生きる力”の意味や必要性についての共通理解を図り、授業時間の確保などをしめたものが新しい学習指導要領になります。

(2)学習指導要領改定のポイント

学習指導要領のポイントとしては以下のような点が挙げられます。

- ・改正教育基本法を踏まえた学習指導要領改訂
- ・“生きる力”という理念の共有化
- ・基礎的・基本的な知識・技能の修得
- ・思考力・判断力・表現力等の育成
- ・確かな学力を確立するために必要な時間の確保
- ・学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ・豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

4. ESDと“生きる力”

新しい学習指導要領には、持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれています。新しい学習指導要領に基づいた教育を実施することにより、ESDの考え方に沿った教育を行うことができます。そして持続発展教育（ESD）の実践により“生きる力”が身につくことになります。自分たちの活動をESDの視点で捉え直すことによって従来の活動のなかにもESDの観点が存在していたことに気づき、自分たちの活動と世界とのつながりを意識し、体験をとおして実感していくことをとおして“生きる力”をはぐくんでいくことができます。ユネスコスクールには大きな可能性があります。ユネスコスクールから、“生きる力”を身につけた持続可能な社会の担い手が育ち、日本を支えていくことを期待しております。

角屋 重樹（国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部長）

○ESDをどのようにとらえるか

○ESDの目標

持続可能な社会づくりにかかわる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。



- ①持続可能な社会づくりにかかわる課題の見だし
- ②それらを解決するために必要な能力や態度を獲得
- ③持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観の形成

(3)ESDをとおしてどのような力を育てるか

- ①批判的に思考・判断する力、
- ②未来像を予測して計画する力、
- ③多面的、総合的に考える力、
- ④コミュニケーションを行う力、
- ⑤他者と協力する態度、
- ⑥つながりを尊重する態度、
- ⑦責任を重んじる態度
- ⑧自己制御能力

○引用文献

岡本弥彦、「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」の発表資料、2010年9月13日。

(1)ESDの最近の研究動向

構成概念中心から資質・能力中心へ

○構成概念中心

- ①相互性、②多様性、③有限性、③公平性、
- ④責任性、⑤協調性など

○資質・能力中心

- ①批判的に思考・判断する力、
- ②未来像を予測して計画する力、
- ③多面的、総合的に考える力、
- ④コミュニケーションを行う力、
- ⑤他者と協力する態度、
- ⑥つながりを尊重する態度、
- ⑦責任を重んじる態度

(2)ESDを通して子どもはどのように変わるか

構成概念を習得し、資質・能力を獲得することから、持続可能な社会の形成者としてふさわしい能力や態度や資質や価値観を身に付けるようになる。

浅香 久美子（石川県金沢市教育委員会 教育長）

人と人とのつながりから、社会・自然・世界との関わりを深める

■世界都市をめざす金沢

金沢市では、平成7年「金沢世界都市構想」を策定し「世界の中で独特の輝きを放つ都市づくり」を基本テーマとして、さまざまな施策を展開している。また、平成13年度には、「金沢子ども条例」を制定し、子どもの幸せと健やかな成長を図ることに努めている。こうした中、平成21年1月、国から「歴史都市」第1号の認定を受けるとともに、同年6月、ユネスコから「クラフト創造都市」の認定を受けている。

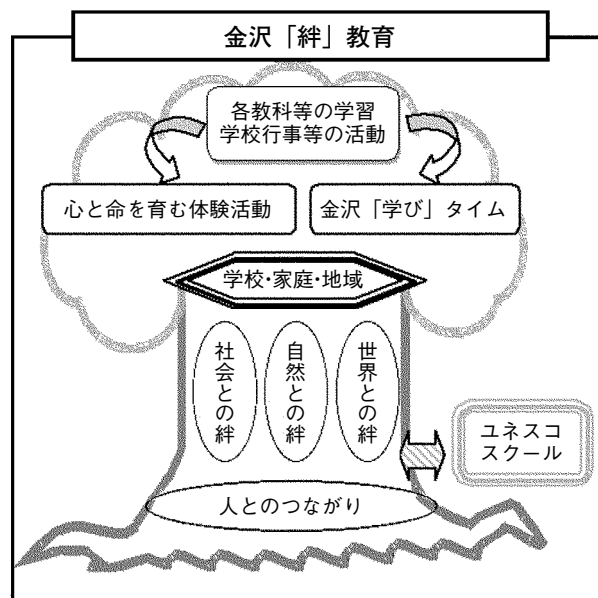
■金沢「絆」教育の推進

学校教育においては、平成16年度から、「世界都市金沢小中一貫英語教育」「学習指導基準金沢スタンダード」「学校2学期制」の3つの柱からなる学校教育金沢モデルを推進してきており、平成21年度からは、新たに「金沢「絆」教育」を加えた第2次学校教育金沢モデルの実践に取り組んでいる。

金沢「絆」教育では、人と人とのつながりを基盤として、社会・自然・世界などとの関わりを深め、自他を共に認め合い、命あるものを大切にする豊かな心を育むとともに、金沢に誇りをもつ児童生徒の育成をめざし、家庭や地域とも連携した多面的な活動に取り組んでいる。

■ユネスコスクールによる持続発展教育の推進

金沢「絆」教育の具体的な取組の1つとし



て、平成21年度より「金沢ユネスコスクール推進事業」を立ち上げ、現在、市立小中学校26校がユネスコスクールに加盟している。加盟校では、児童生徒や学校・地域の実情に応じて、これまでの環境教育、伝統や文化に関する教育などに、持続発展教育の視点をさらに加えた新たな実践を総合的な学習の時間などを中心に進めている。また、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、特に「自分にできることは何か」など、児童生徒の考え方や行動の変容を大切にしている。

■取組の充実に向けて

ユネスコスクールとしての実践を深めるために、教員による交流会、「ユネスコスクール子ども会議」、「ユネスコスクールフォーラム in Kanazawa」などを開催している。

本市の取組は、まだ緒についたばかりであり、今後は、新学習指導要領の実施とあわせて、教育活動全体の中で取組の充実を図るとともに、学校間の連携・交流を深め、次代を担う子どもたちに「生きる力」を育んでいきたい。



金沢「絆」教育の取組として行った「全市児童生徒あいさつの日」、「全市児童生徒ボランティアの日」の活動の様子

藤村 俊美（宮城県気仙沼市立大谷小学校 校長）

1 発表のテーマ

本校でのESDの取組内容と「生きる力」

2 発表の概要

(1)本校の概要

①学区の位置

②児童・地域

(2)ESD取組の経緯

①海、山、川、農地等の自然に恵まれた地域

②幼稚園、中学校、公民館、福祉施設が隣接

③気仙沼市に合併

・平成21年9月1日

・気仙沼市が推進するESDの仲間入り

④大谷中学校での環境教育「ハチドリ計画」

との連携の模索

(3)ESD取組の概要

①生活科・総合的な学習の時間での主な内容

・1学年～「通学路」

・2学年～「まち探検」

・3学年～「大谷の海」「まちのお年寄り」

・4学年～「みんなの滝根川」「福祉」

・5学年～「冬みず田んぼ」「大谷の防災」

・6学年～「松枯れ」「大谷から世界へ」

②校内研究としての位置づけ

【研究主題・副主題】

生活科・総合的な学習の時間における表現力の育成～地域を見つめ、調べ、よさを伝え合う活動を通して～

【研究の視点】

視点1：地域学習カリキュラムの作成

視点2：問題解決過程の在り方の工夫

視点3：実態把握と評価の工夫

③主な体験活動

ア 田植え体験（全学年・幼小中合同）

イ 稲刈り体験（全学年・幼小中合同）

ウ ワカメの種はさみ体験（3学年）

エ 高齢者との交流（3学年）

オ キャップハンディ体験（4学年）

カ 代掻き・脱穀活動（5学年・中学校）

キ 松枯れ調査活動（6学年）

(4)校長としての関わり

①校長の積極的な関わり

②地域のコーディネーターとの連携強化



稲刈り体験活動（幼小中合同）

3 「生きる力」の育成について

①豊かな体験活動の充実

②地域を生かした幼小中の連携強化

③地域を知り、地域を愛し、地域のよさを発信する児童の育成



ワカメの種はさみ体験



松枯れ調査活動

藤本 秀穂（広島県立広島中学校・広島高等学校 高校教頭）

本校における「ESD」の取組について

1 はじめに～学校概要

平成21年8月、ユネスコスクールに加盟

2 本校における「ESD」推進について

(1)推進に当って

(2)スタートで実施したこと

(3)「ESD」推進の基本的な考え方

●推進構想

●「ESD」を通して育む力・価値観

3 本校における「ESD」の取組

(1)総合的な学習の時間等

●ことば科（中学校特設の必修教科）

●総合的な学習の時間

(2)各教科

各教科の目標と生徒による授業満足度

(3)特別活動（学校行事）

4 まとめ

本校における「ESD」の方向性

●文化理解中心から「地球的諸課題の認識と解決への行動」

●「違いは豊かさ」A and B

見えないものをつなぐ・自分とのかかわりを考える

そしてグローバル・パートナーシップ

5 おわりに

今後の課題



運動会・HAKA



文化祭・タイ料理店

実践報告（幼稚園）

桐野 ゆみ（奈良県 奈良市立富雄北幼稚園）

幼稚園教育はあらゆる教育（食育、人権教育、環境教育、国際理解、平和教育など）の芽生えの時期である。本園では可能な限りESDの実践を深めて生きたい。

食育では、育てた小麦を収穫し、粉にしてホットケーキを作った。また、幼稚園で採れた苺をジャムにし、その上に乗せてホットケーキパーティをした。子どもたちは、収穫の喜びと共に、ホットケーキやジャムの原料が身近にあるものということがわかった。栽培している野菜を収穫したら何にして食べようかと、保

護者を巻き込み食への関心が広がっている。平和教育では、絵本「まちんと」を読み聞かせ、広島原子爆弾による女の子の命について、みんなで考えた。同日、『園長通信』でその内容を知らせたところ、保護者から「何度も読んで欲しいといわれました」「小さい子でも何かを感じるのですね」と反応があった。環境教育では、地球温暖化について、パネルシアター等で理解を促し、stop温暖化について自分たちのできることを実践しようとしている。

松永 茂樹（佐賀県 鳳鳴乃里幼稚園）

1. 実践の概要

人や自然を愛し大切にすることを育みたいと考え、エコキャップ活動や、エコレンジャー活動に取り組みました。

エコキャップ活動は、保護者の協力を得て家庭で廃棄されるペットボトルのキャップを持ち寄り、分別集計して集積場所へ発送します。

エコレンジャー活動は、子ども達が大好きな戦隊ものになぞらえ、自治体から頂いたエコバッジを着けて変身し、近くの道路や神社、公園へゴミを拾いに行きます。

その他、運動会では環境をテーマにエコ活動に気づ

く様な取り組みもしました。

2. 主な効果

エコキャップ活動では、ゴミの活用で助かっている命があることを認識する様になりました。

エコレンジャー活動では、拾ったゴミを分別するので、ゴミを捨てては行けないとか、分別の意識が高まりました。

運動会の競技で電気を消して走った経験から、家庭でも「CO2が出ているからつけっぱなしにしないで」と言う様になりました。

3. 課題

交流できる園があったら嬉しいです。

実践報告（小学校）

熊谷 嘉文（宮城県 気仙沼市立大島小学校）

海に囲まれた大島は、国立公園に指定されている景勝地であり、観光業も盛んである。この自然に恵まれた大島の豊かな環境を学習素材とし、児童の知的好奇心を喚起し、課題追究型の問題解決的な学習ができるように環境学習プログラムを実践している。具体的には、1・2年生は四季を通じての自然とふれあう活動、3年生は磯の生物などを通して大島の自然についての学習、4年生はワカメの養殖体験などを通して海についての学習、5年生はホタテの養殖体験などを通して

養殖業と海の関係を中心とした環境についての学習、6年生は地域のすばらしさとともに課題を見つけ、地域を支えていくためにできることを考える学習を行っている。これらの学習を通して、児童は「疑問をもつこと」「予想すること」「調べること」「考えること」などの活動に、意欲的に取り組むようになってきている。今後は、学習したことをどのように発信していくのかについて工夫していきたい。

菅原 弘倫（宮城県 気仙沼市立大谷小学校）

1 実践の概要

- (1) 地域学習（環境、福祉、歴史、産業）中核にしたESDの取組
- (2) 地域学習コーディネーターとの連携
- (3) 幼小中の連携

2 主な成果

- (1) 地域学習コーディネーターの依頼から、大学、NPO法人等の環境教育の専門家による児童対象のセミナーを実施した。

- (2) 冬水田んぼの一連の活動を、幼小中の合同で実施した。

3 今後の課題

- (1) 本校のESDの取組をホームページ等で発信し、ユネスコスクール加盟校との交流を深める。
- (2) 児童、保護者、地域に対して、ESDの活動の様子を授業参観や学習発表会などを通して知らせ、理解を求めると共に、一層の協力を求めている。

渡辺 実（宮城県 気仙沼市立落合小学校）

1 実践の概要

本校では、ESDの実践として、以下のものに取り組んでいる。

- ①総合的な学習における活動として〔中学生の落合地区の環境調査、川の水質・生物調査、有機農業体験・自然保護、地域と保護者連携農業〕〔高学年のエコ活動（節電、節水、ゴミ減量）〕
- ②全校児童とPTAの協力による活動として〔野菜や花の栽培活動〕〔EM菌活用によるプール清掃〕
- ③児童会によるこどもエコ活動として〔水の節約・完

食調べ〕

2 主な成果

子供たちの環境への関心が高まり、自然の恵みの有り難さや自然の大切さを感じとるようになった。また、エコ活動への関心も高まった。

3 課題

ESDに関わる様々な活動に取り組んでいるが、ESDが自分たちの活動や生活とどのように関わっているのか、学年に応じた理解を深めさせる指導を一層充実させたい。

山崎 隆一（宮城県 気仙沼市立階上小学校）

地域の未来を考える階上小スローフード学習

気仙沼市のスローフード都市宣言の理念を学習の場に生かし、1年生から6年生まで、「食」に関わる題材から課題を見つけ、地域の自然や文化、人々とかわり合いながら課題を解決していく学習を系統的に取り入れている。「スローフード学習」は、地域の特色ある「食」を切り口にして学ぶことで、食を取り巻く自然や人々のくらしのつながりを考える力や自分の生き方や将来のあるべき地域の姿を提案できる力を育て

る学習である。

これまでの取組によって、児童は、地域の人とくらし、自然を総合的に考える意識が育ち、未来への貢献についても考えるようになってきた。

しかし、学習の中で各教科で身に付けた知識や技能を十分に生かして学習を進めたり、教科の知識・技能に再び立ち返り、確かな自分の力として身に付けさせることには課題がある。

大曾根 良憲（宮城県 丸森町立金山小学校）

本校は丸森町中心部より南東部に位置し、全校児童数が約60名台で推移している小規模校である。

地域の住民や保護者による手作りの竹馬で冬場の体力づくりに竹馬運動会を行ってきて今年で40年、また学校に隣接する桑畑で蚕を飼育し、各学年それぞれに工芸作品の制作体験をしたり、地域の文化や伝統に親しむ地域の文化祭へ全校体制で参加するなど、地域の伝統や文化の継承を図り、児童と地域が接続可能な地域社会づくりに向けた実践を重ねてきている。

地域の方々が学校へ寄せる期待や信頼は大きく、また大変協力的である。そこでさらに地域の伝統や文化

の良さを生かす活動推進の契機になればと考え、今年度よりE S Dの実践校の仲間入りをさせて頂いた。

加盟初年度につき成果は割愛するが、地域との深いつながりや少人数の学習環境などという利点を十二分に生かし、めざす児童像の具現化に向けて継続性・発展性のある実践を更に推進していきたいと考えている。

宮城県 丸森町立金山小学校HYPERLINK

<http://www.town.marumori.miyagi.jp/hp/kane-sho/>

代表者 校長大曾根良憲

畠山 友一（宮城県 気仙沼市立唐桑小学校）

1：実践の概要

本校では、保護者や地域と連携した牡蠣養殖体験活動を通して、ふるさと唐桑の豊かな海や自然のすばらしさを実感させ、より良い社会の担い手を育成するために環境教育の推進を図ってきた。種牡蠣から始まり、牡蠣の体のつくりや日本一の牡蠣を育てるための工夫、生物多様性などについて、山・川とのかかわりから唐桑の海の特性にせまり、牡蠣養殖を持続するための課題を追求した。最終学年では、収穫活動を通して「食の安全」や「唐桑の牡蠣の流通」などについて、

課題を追求した。

2：おもな成果

豊かな自然の恵みだけではなく、多くの人の支えや工夫があることから地域の産業として成り立つことを、体験を通して理解できたと思われる。

3：課題 など

牡蠣筏の補修等の予算や活動に関わる理科備品等の予算の確保。また新教育課程全面実施に向けて、各教科との関連を十分に図ったものに改善を図りたい。

小松 英紀（宮城県 気仙沼市立九条小学校）

1 実践の概要

4 学年は、学区内を流れる神山川にすむ生き物調べを行い、生き物同士のつながりや生き物と自分たちの生活や環境とのかかわりについて調べたり考えたりする。この学習では、身近な環境を守っていかうとする心情を育てる。5 学年は、地域でとれる農産物や水産物について調べる学習を通して、自然環境を生かした産業が気仙沼では盛んであることを理解する。この学習では、地域の自然を守っていかうとする心情を育てる。6 学年は、気仙沼を紹介するパンフレットを作るために、様々な観点から気仙沼について調べ、気仙沼

のよさを再認識する。この学習では、自分たちの住む町のよさについて理解を深めるとともに、自分たちの故郷を大切にしていこうとする心情を育てる。

2 おもな成果

一人一人の児童が体験学習や調べ学習を通して、身近な環境や地域の自然、故郷についての理解を深めた。また、これらを大切にしていこうとする心情が高まった。

3 課題

他校への情報発信や他校との情報交換などの交流を行っていきたい。

菅野 宏明（宮城県 気仙沼市立気仙沼小学校）

1 実践の概要（ESDの一取り組み：グリーンウェーブ2010に参加して）

本校では、校庭に、今はめったに見られなくなった国蝶のオオムラサキを呼び戻すために、エノキの苗木3本を植樹した。植樹は児童会の飼育・栽培委員会が中心になって行い、「グリーンウェーブ」の活動やエノキを植えた目的等は、朝会や掲示物で全校に周知した。

観察活動が始まり、植樹してから1カ月が過ぎた頃、葉の表面に丸い卵が10個ぐらいの固まりになって付いている所が6箇所見つかった。卵から幼虫になり、幼

虫はどんどん葉を食べた。児童は、「このままでは、葉が全部無くなるのでは、」「幼虫をとるか苗木をとるか。」等を話し合い、苗木を増やすことにした。苗木が届いた頃、幼虫はほとんどいなくなった。児童は「蜂や鳥に食べられたのか。」等、様々なことを考えた。

2 おもな成果

3本の植樹は、児童に生物多様性についての認識を深めるよい機会になった。

3 課題

オオムラサキを呼び戻すことができるまでこの活動をどのようにしたら、継続できるか。

宮城県 気仙沼市立鹿折小学校

地域を見つめ、世界とつながるESDの実践

1) ねらい

自分と人やもの、社会、自然環境とのつながりが分かり、ふるさとを愛し、豊かな国際感覚を身に付けた児童を育成する

2) 実践内容

本校のESDは国際理解を軸にして、地域の特性を生かした環境教育にも重点を置いて取り組んでいる。例年7月と12月には宮城教育大学と連携し、生活科や総合的な学習の時間での取り組みをテーマに国際交流活動を行っている。この交流活動を通して、児童は身近

な地域と外国の自然や環境、伝統や文化、産業などの違いに気付き、進んで関わっていこうとする意欲を高めている。

[7月の実践例・3年生]

児童からは「鹿折の宝」をテーマに地域の自然や畑、施設等を紹介し、留学生からは母国の料理や世界遺産等について教えていただいた。児童にとって交流は、総合的な学習の時間の探究活動への動機付けとなった。

松岡 清貴（宮城県 気仙沼市立新城小学校）

1 実践内容

(1)活動計画

本校は、水産都市気仙沼市にありながらも、海と山をつなぐ中間点に位置し、その文化も山里のものが多く残っている。その中で、今年度は「ふるさと新城の自然を知ろう・作ろう・育てよう」をテーマに、地域に根ざした活動を計画し、先人・先達の方々から、生活の知恵や技能を受け継ぎながら、地域の一員としてのESDを展開している。

(2)活動の様子

具体的には、自然環境を生かした体験活動として、農業体験、地域を流れる大川の生き物調査、地域に伝

わる伝統文化や産業の体験活動、地域の歴史についての学習が行われている。いずれの活動においても、地域の伝統や現状を学ぶことにより、これからの自分たちの住む地域にさらに必要なことは何かを考えようとしてきています。また、学校から地域へと学びの場が広がっていることが感じられる。

2 今後の課題

新学習指導要領の全面実施に向けて、年間指導計画を編成していく上での各教科等との連携を意識した指導計画を作成することや、地域に根ざした良い活動を継続できるようなシステム作りを構築していく必要性がある。

山本 正美（宮城県 気仙沼市立月立小学校）

月立小学校は宮城県気仙沼市の北端にあります。29名の子どもたちが豊かな自然に親しみ、温かな地域の人たちに支えられながら「ふるさと八瀬」の良さを体感する活動に取り組んでいます。本校では『自然』『伝統』『人との関わり』の三つをキーワードに、低・中・高の学年部と全校でESDの取組が行われています。低学年は八瀬川での川遊び、鮎の放流と採取、サツマイモ栽培に取り組んでいます。中学年は伝統産業体験として蚕の飼育とそばの栽培をしています。高学年は他

地域との比較や歴史的経緯を踏まえながら、大豆の栽培や炭焼き体験を行っています。塚沢神楽にも取り組んでいます。更に全校で、77歳以上の祖父母に子どもたちの作品を敬老帳としてとじ、配布しています。今年で42年間続く行事です。また、全校で伝統芸能早稲谷鹿踊りに取り組んでいます。2月には、お世話になった方々を招待して発表会を実施し、感謝の気持ちを表しています。

松本 尚人（宮城県 気仙沼市立中井小学校）

ふるさとを愛する心と豊かな国際感覚を養い、共に未来を生きる子供を育てるESD

1 実践の概要

公民館や地域と連携した「ふるさと学習会」を柱に、発達段階に応じた豊かな体験学習を基盤に「ふるさとを愛する心をはぐくむ」とともに、国際社会を豊かにたくましく生きる子供たちの育成をめざし、地域に在住する外国出身の人材を発掘したり、海外の人々と直接交流したりして、地域や海外との協働による国際理解教育を推進して、子供たちに「豊かな国際感覚を養う」ESDを実践している。

2 おもな成果と課題

子供たちは、この地域に根ざし、地球的視野での学びを通して、身近な地域のよさに気付くようになるとともに、世界の広がりや多様な文化にも目を向けるようになってきた。今後も、ユネスコスクールのネットワークを生かして国内外の子供たちと協働しながら、皆が共生できる持続可能な地域や世界について、“Think Globally, Act Locally”で学び・考え・探求する活動をより一層進めていきたい。

伊藤 公一（宮城県 仙台市立中野小学校）

本校の学区内には七北田川が流れ、世界でも有数の渡り鳥の休息地として有名な蒲生干潟がある。春には河口にサケの稚魚を放流し、夏と秋には干潟で野鳥観察を行い、冬にはサケの地引き網と採卵・飼育を行っている。その他、干潟清掃活動など、人と自然が共存し、次世代へ持続する環境保護の大切さを子どもたちに考えさせることをねらいとした環境教育を実践している。

主な成果としては、自分の思いを相手に伝えるため

に、話す・聞く力を身に付けようとする子どもたちの意欲の向上が見られる。指導者も各種研修会・発表会に積極的に参加し、教科学習とのらせんの関連を検証するだけでなく、学校教育目標や学校教育活動全体との関連をより意識して指導にあたるようになった。

現在、七北田川沿いの学校間や、サケの回遊を通じた環太平洋の学校間での交流会なども構想中である。

富士原 かよ子（宮城県 角田市立東根小学校）

1 実践の概要

東根小学校では、「持続可能な社会を構築するための生きる力の育成」を重点努力事項の一つに掲げ、地域の自然や文化（長芋栽培、稲作、サケの幼魚放流、EM菌を使った環境改善等）を体験的に学習したり、国際的な視野を広めるため、読書活動の推進や外国の方々との交流、外国語学習（英語）を行ったりしています。

2 主な成果

実践を進めていく中で、児童は、地域の自然や環境、

文化をこれまで以上に深く知ることができました。また、世界の情勢にも目を向けるようになり、世界で起きているいろいろな問題などについても、積極的に考えるようになりました。

3 課題

これからも、地域や世界に目を向けた取り組みを行うとともに、新たに他地域との交流を勧め、みんなが共生できる持続可能な地域そして世界のあり方についての学習を進めていきたいと考えています。

跡部 英行（宮城県 富谷町立日吉台小学校）

今年度、ユネスコスクールに登録。9月から文部科学省委託事業「学校&みんなのESD」のプロジェクト協力校としての実践を推進。現在、これまで本校で取り組んできた各教科の学習や総合的学習の時間における活動をESDの視点から捉え直すとともに、本校らしいESDの実践を進めている。

1 職員研修の推進～校内伝講会、宮教大での講義受講～

2 各種関係機関・企業とのコラボレーションによる活動の展開

～「ゆめのもり」でのバタフライガーデンづくり、エコランタンページェント～

3 課題

来年度も「学校&みんなのESD」プロジェクト協力校として再委託を受け、より充実した活動を展開していけるかが課題。

須藤 勝子（宮城県 気仙沼市立馬籠小学校）

人・自然・地域に学ぶ馬籠っ子

豊かな森林に囲まれた地域の特色を生かし、森林をテーマに地域の様々な団体と連携を図りながらESDを推進している。

林業振興に関する地域人材や団体、施設とのネットワークを活用した体験的活動（学校林への苗植え、施肥、下草刈り、高齢者との草取り等の合同作業）を実施している。また、外部専門家を講師に迎え、環境面から森林の役割を捉えるための調査活動を実施する予定である。学習したことは地域の人を招いての発表会、

ポスターやパンフレットの作成、HPなど様々な方法で発信している。

地域の諸団体と連携し活動を進めてきたことで、高齢者の生きた知恵や技術に直接触れるなど、世代間の交流を深めることができ、人・自然・地域のつながりに目を向けることができた。

表現力の向上を図りながら、国内及び海外の学校との交流を図り、日本の文化の理解や異文化理解に発展させていくことが課題である。

菅野 昭夫（宮城県 気仙沼市立松岩小学校）

1：実践の概要

本校では総合的な学習の時間の共通テーマとして「共に生きる」を掲げている。そのテーマのもと、地域にある福祉施設や特別支援学校などとの交流や、様々な技能や特技をもつ地域の人たちとの交流などを行っている。さらに、フィリピンの小学校児童と絵画交流も行っている。また、「森と川と海」のつながりに目を向け、自然を守るための活動についても考えて

いる。

2：おもな成果

いろいろな立場の人々と交流することにより、様々な人々と共に生きていることに気付き、これからどのように関わっていけばよいかを考えることができた。

3：課題

学年ごとの実践を全体で共有し、さらにそれぞれの活動に生かしていくこと。

佐藤 清貴（宮城県 気仙沼市立面瀬小学校）

1 実践の概要

本校は、2003年から「水辺環境と人々の生活」をテーマに、継続して環境教育を推進してきた。昨年度は、『「持続可能な未来を目指す環境教育の推進」～人と自然環境とのつながりに気づき、主体的に関わる子供を育てる「探究型学習プログラム」の実践を通して～』をテーマに、『1年：おもせていいな、2年：つくって食べようおいしい野菜、3年：レッツゴー面瀬昆虫探検隊、4年：命を育む面瀬川、5年：川がつなぐ森と海、6年：私たちの面瀬～持続可能な未来をめざして～』に取り組んだ。

2 成果と課題

(1) 成果

- ・水辺環境と自分たちの生活のつながりに気づき、環境問題への興味・関心を高めることができた。
- ・体験を通し、自然環境のつながり・生物多様性について理解を深めることができた。

(2) 課題

- ・地域・専門機関等との連携の持続化と学校の推進能力・組織力の向上
- ・児童の課題意識を高め、主体的に課題を追究できる学習プログラムの見直し
- ・児童の思考・判断力や表現力の育成
- ・環境問題に対する高い意識の向上と行動力の育成

高橋 しげ子（新潟県 十日町市立飛渡第一小学校）

1 実践の概要

地域の公民館や農実会（地域興しの会）と連携・協力して、飛渡川での遊び・クリーン作戦、ブナ林での宝物探し、サケの卵を育てて放流する、EM菌を使っ
てのプール清掃、米作り、野菜作り等をしている。また、東京インドネシア共和国学校を訪問して交流をしたり、地震の被害に対してお見舞いの手紙や品物を送ったりした。

2 おもな成果

○児童は、地域に誇りを持っている。○地域が学校を大事に思い協力をする。

3 課題

- ・これまで20年以上の歴史がある活動をいかに継続発展させていくか。
- ・児童数、職員数が減少している中で、いかに活動を充実させていくか。

山本 茂（富山県 富山市立寒江小学校）

1：実践の概要

「自然と社会、人、文化とのかかわり」「体験的な学習活動」をキーワードに、郷土を慈しみ、共生社会の実現を目指す担い手としての子どもの育成を目標に、生活科・総合的な学習の時間を中心として実践に取り組んでいる。

2：おもな成果

自分の生活とのかかわりや親しみ、よさを意識しながら学習することを通して、郷土を大切にしようとする

心情や態度、地域の一員としての自覚を高めてきている。

3：課題

「自分とのかかわり」「今までの実践をESDの視点から見直す」ことからスタートしたが、今後は、全教育活動に広げたり、地域に加え、さらにグローバルな視点からもESDを見ていく必要があると思われる。

伏間 三晃（富山県 富山市立中央小学校）

1：実践の概要

2008年4月に開校し、ユネスコ先進校の情報収集と専門家を招聘しての研修会を行い、2009年2月にユネスコスクールの承認を受けた。「自然にやさしい、人にやさしい、地球にやさしい」のテーマを掲げ、ESDカレンダーを作成し実践している。

1、2年生は生活科を、3年生以上の学年では総合的な学習の時間を中心にストーリー性のあるカリキュラムを開発し、特色あるESDの実践が展開されている。

（例、2年「ともに生きる」3年「発見！発信！中央小たんけんたい」5年「食の向こうに見える世界」等）

2：おもな成果

ユネスコスクール加盟校を対象にした教材の提供や助成金の活用により、子どもたちが対象に自らかかわろうとしたり、コミュニケーション能力が高まったりするなど学習活動が充実した。ユネスコ協会からの講師派遣により、教職員や子どもたちのESDへの理解が深まった。

3：課題

“1年間を見据えた、ストーリー性のあるカリキュラムづくり”、“学校と地域をつなぐための方策”、“知のネットワークづくりの確立”に重点を置いて今後進みたい。

勘村 圭一（石川県 金沢市立金石町小学校）

1. 実践の概要

海という大きな自然があり、歴史や文化も豊かで、スケールの大きい先人を輩出している金石は学びの素材が豊富にある。これらの素材を活かさないことはたいへん勿体ないことであり、各学年とも実態に応じて総合的な学習の時間で地域学習をすすめている。

2. 成果と課題

子どもたちにきっかけを与えるとすぐに調べたい、見てみたいと意欲に満ちた態度になる。それはまさに金石が好きである証しであると考えます。3・4年生は

知りたい気持ちが強く、調べて知識を得ることに達成感を見いだしている。5年生になると、自分たちの金石を他の地域（市内の他地域・石川県に来た観光客・HPで世界中）に誇りたい意欲が高まっている。6年生になると、自らを見つめるようになり、地域の中で今できることを考えるようになっている。

他校との実践交流ができていないことが残念である。発信はできているが、各々の学校の発信されたものに対して再発信できていない。やりとりがあつてのネットワークである。

坂上 則子（石川県 金沢市立四十万小学校）

1. 実践の概要

「環境」「伝統文化」「食」「国際理解」を3年生から6年生までのテーマとして学習を進めている。地域の特性を大切に地域から学ぶ活動が多い中学年。高学年では、地域だけにとどまらず、グローバルな視点で事象を見たり考えたりできるような学習を進めていきたいと考えている。

2. 主な成果

教師が「持続発展教育」をどのように学習に取り入れるかということについて学習会をもった。これまでの学習を生かし、内容を持続可能な社会の構築という

視点、さらに明確な方向性を見いだすことができたのは成果だと考える。

3. 課題

ESDカレンダーをもとに各教科との関連を図りながら学習を進めている。その中で、どの学習でどのような児童の力をつけていくかをカリキュラム上に明確にしていくが必要であると考えている。さらに、地域の人を巻き込んでいけるような活動を進め、子どもたちが地域へ発信していけるような活動を位置づけていきたいと考える。

池端 弘久（石川県 金沢市立中央小学校）

本校では、総合的な学習の時間を中心に、校区を流れる二つの用水に生息するホタルなどの水生生物を調査したり、用水にかかわる人々に学んだりすることを通して、環境教育の充実を図っている。また、校区や金沢市内にある歴史遺産や公共施設、伝統工芸の職人の方々などに学ぶ伝統文化教育や、校区にある市社会福祉協議会と連携した福祉教育についても充実してきている。その経過の中で、用水とその人々を学習対象

とした総合的な学習の時間の教育課程を複数年かけスパイラルに学べるよう改訂し実践に移せたことや、子ども達の用水をはじめとした地域への親しみが増えていることは成果である。しかし、一方で理科や社会科、生活科等の教科との連携をこれまで以上に深めることや、この特色ある教育課程の継続と発展、学習のプロセスや成果等について国内外の学校と交流することについては、今後の課題である。

中村 晶子（石川県 金沢市立三馬小学校）

1、2年生は生活科で植物の育成を中心に学習し、3～6年生の総合的な学習では、3年地域、4年福祉、5年環境、6年国際理解・共生をテーマに据え、学年を追うごとに校区→金沢→世界へと視野を広げた学習を展開している。また、全学年で食教育や英語学習にも取り組んでおり、特に食育の活動では加賀野菜や金沢近海の水産物の生産者を招き、金沢伝統の食文化にふれる学習も行っている。これらの学習を通して、人とのつながりを大切にし、出会った方の生き方や仕事

に向かう姿勢、人との関わり方などを学んでいる。

また、児童会活動では、国際理解として、30年以上にわたり「オレンジ作戦」を行っている。オレンジ作戦では、毎年ブルキナファソなど途上国に住む方を招き、国の現状を聞き、児童会を中心として文房具の援助などの協力を行っている。課題としては、早急にESDカレンダーを作成し、生活科や総合的な学習をさらに充実させることがあげられる。

山村 薫（石川県 金沢市立森山町小学校）

1 実践の概要

金沢の伝統産業に携わる人との出会いから、職人さんの技や誇りを持って生きる姿にふれ、さらに後継者不足などの厳しい現状を知ることで、「自分たちが今、できることは何か?」と探究的な学びへと繋ぐ。金沢の伝統産業を大切に思い、「地域の文化や人との絆」を意識できる子どもの姿を育むことをねらいとした。

3年：「和菓子」

4年：「金箔箔」など

5年：「郷土食品を使った創作レシピづくり」

6年：「思いをこめた加賀友禅 卒業証書台紙づくり」

2 おもな成果

各学年における取組を通して、子どもたちは地域のよさを再認識し、さらに、こうした人との絆や交流を大切にし、地域の文化を大事に思う気持ちが、子どもの姿を通して感じられるようになった

3 今後の課題

本校の学びの最終スタイルとして、「学びの発信」がある。他国との文化交流をする機会を設け、自国文化との比較学習をすることで学びが深まるような機会を、今後考えていきたい。

江島　しのぶ（東京都 江東区立東雲小学校）

ESDカレンダーと実践

本校は、ユネスコスクールの4つの観点をもとに、各教科・領域の横断的・総合的な学習を展開するためにESDカレンダーを作成している。学校教育のあらゆる場面でESDの実践が可能であり、かつ、子どもたちにとっては学習内容や活動が関連していることにより学び方を身につけ、思考し、行動に結びつく過程から多くのことを学ぶことができる。

このような学習を通してきた本校の児童は、地球環境問題を始めユネスコの国際システムへの理解など興味関心が高い。毎年、全校児童による学習のまとめとして行う「東雲フェスティバル」では、地域の方や保護者を前に堂々と発表している。教育課程の位置づけを明確にした教育実践ではあるが、教育委員会等との連携が十分でなく、ESD活動の理解と推進が捗れない。

黒田　雄一（千葉県 市川市立中山小学校）

教科とのリンク

1 実践の概要……本校では教育目標「心豊かに やさしく たくましく」を受け、各教科領域で「体験活動」の充実を図っている。具体的には、地域の自然博物館の専門家・学芸員を授業で活用し、「学校ジオトープ」や「公園探検」での低・中学年の動植物観察、地域の自然観察園や海の生態観察である「グリーンスクール」「ネイチャースクール」などの宿泊体験を実践している。

2 成果……動植物への愛情の深まりや環境への興味・

関心が高まり、理科や総合的な学習の時間における探究心・思考力、持続発展教育への礎となった。夏休みの自由研究等でも個人の表現力が高まった。

3 課題……ユネスコスクールの学習プログラムについて、より深く研修を重ね、半世紀以上積み重ねてきた本校の「理科・生活科研究」とのかかわりや持続発展教育の理念を全教職員に普及・啓発を図るための校内研修会等の充実を図りたい。

野原 清春（岐阜県 岐阜市立島小学校）

施しでなく、命の学習・人権学習にするために

【課題】単に葉書や募金を集めて送るだけでなく、自分を見つめる学習・社会と自分の関わりを考える学習にするには



「問題意識を子ども達にどのように持たせるか」

【取組の一例】児童会常時活動とのリンク

- ・島小のユネスコ活動は「思いやり運動」「命の学習」であるという意義づけ



「自分たちの教室の中に差別や思いやりに欠ける行為はないのか」という問い



子どもたちの日常生活へ返す（児童会の常時活動と連携して）



最後は島小児童会ユネスコ憲章へ【みんなの心の中に平和のとりでを築くために】

- ・自分たちの取り組みの成果が目に見え、実感できるものに



児童会で使わない文房具を募集する



ユネスコ青年部の方の協力で、カンボジアの寺子屋と交流する



文房具を贈る。絵や写真を交換する。



送った色鉛筆を喜んで使ってくれた。僕も役に立てた。【相互理解・相互扶助】

【成果】

- ・本校に在籍する外国人の子ども達に対する周囲のまなざしが温かくなった。
- ・寺子屋との交流が継続している。現在、絵本も集めている。校内に「カンボジアとの交換日記」が置かれた。

益川 直子（大阪府 豊中市立上野小学校）

(1)テーマ 「広げようエコライフ」 第4学年

社会科で学習したことを、相互に関連付け、今後の学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにするために、ESDの視点から、①世界一大きな授業や②いろいろな国のくらしとごみ・水を、総合的な学習の時間に実践した。

(2)おもな成果

児童会の取り組み（カンボジアの学校へ絵本や教材を送る）の意味が4年生なりに理解できたようだった。

くらしの中の身近な問題であるごみや水のことが、世界中のいろいろな国でも問題であることや、日本のくらしを見つめることができ、子どもたちの視野が広がった。

(3)課題

1学期の取り組みを2学期以降につなぎ、3学期には自分たちのエコプランを考え、広げるためのアクションを起こしていけるよう、様々な手立てを考えるとともに教材を選定中。

河野 晋也（奈良県 奈良市立済美小学校）

本校は周辺に「古都奈良」を感じさせる風景が多くあり、また、世界遺産に登録された文化財も校区に近く、いわゆる奈良らしい場所にあるといえる。児童は、これまで大切に受けつがれてきた世界遺産や地域遺産、伝統文化にふれたり、身近にある「人・もの・こと」について調べる学習を続けている。関わった人々の思いを感じ取り、奈良でよりよく生きるためにはどうすればよいのかを、児童が主体的に考えていく教育をすすめている。

児童は、低学年から学習を積み重ねていくことで、奈良や済美のまちの良さを実感し、「昔の人の思いを受け継いでいかなければならない」「今ある良さを守っていきたい」と考えるようになってきた。同時に、地域や奈良のまちの中で見つけた課題は、自分たちに直接関係のある問題として受け止め、具体的な行動に移す姿も見られた。今後は、児童が自分の生き方を見つめ続けることができるよう、中学校との連携が大切だと考えている。

中川 素（奈良県 奈良市立椿井小学校）

わたしのまちのたからもの

1. 学習の概要

6年前より高学年の総合的な学習の時間の活動で、D-project（デジタル表現研究会 <http://www.d-project.jp/>）の「ユネスコ運動 D-PROJECT」へ参加し、世界寺子屋運動に取り組んできた。この取組を通して、ユネスコ協会のもう一つの大きな活動である「世界遺産」についてもゲストティーチャーの方から知ることができた。そこで、身近に世界遺産等の文化財を感じる校区の特色を活かし、フォトストーリーを教材とした学習活動を通してメディア創造力の育成を行った。

そして、外国語活動で身に付けた力を使い、奈良の良さを海外へ発信したいと考えた。

2. 成果

自分たちの住む町「奈良」のよさを再認識し、奈良を誇りに思う態度が育ってきた。また、海外に発信するためにはどうすればよいかを考えることができた。

3. 課題

発信するには相手が必要であり、学校間の連絡を密にとっていく必要がある。

佐藤 敬子（広島県 福山市立内海小学校）

生活科、総合的な学習の時間に、エネルギー・環境及び地域に関わる単元を設け学習を行っている。各学年の主な題材は、1年生が「自然」、2年生が「生き物」、3年生が「海」、4年生が「ごみの削減と再利用」、5年生が「環境とエネルギー」、6年生が「世界とのつながり」である。各学年とも題材に沿った学習課題を設け、体験し調べたことを元に、課題解決に取り組み、他学年や保護者、地域の方に成果の報告や啓発を行っている。

地域の身近な教材をもとにエネルギー・環境問題について考えることで、環境問題に対する関心が高まり、自分たちの生き方を見つめ直すことができた。

総合的な学習の時間の単元指導計画に各教科・領域との関連を記し、関連を意識して指導しているが、今後ESDカレンダーを作成し、各教科・領域でより一層ESDに関わる学習を進めていきたい。また、外部人材の積極的な活用についても考えていきたい。

実践報告（中学校）

島田 智（秋田県 大仙市立大曲南中学校）

本校は環境教育の視点からESDに取り組んでいる。環境教育のカリキュラムデザインを作成し、総合的な学習の時間と各教科等の関連を図った体系的な環境教育の実践でESDに取り組んでいる。

「未来の地球 今わたしたちにできること」をテーマに、学区の小学校や外部機関との連携をとりながら取り組んできた。環境に配慮した行動や、環境に関する会話が日常的に見られるなど、環境に対する意識や

知識が高まっている。今自分たちができる、小さなことから取り組むことで、持続可能な社会を作ることができるという気持ちも高まり、学習の行動化にもつながっている。

今後は環境分野を核としながら、国際理解や経済など環境と関連する様々な分野も広く学習することでESDを深めていきたい。

阿部 陽（宮城県 岩沼市立岩沼中学校）

1 実践の概要

- ① 給食における地産地消の推進と農業体験学習の実施
- ② 生徒会・JRC委員会のネパール支援事業・介護保険施設でのボランティア活動
- ③ 科学部の阿武隈川流域の帰化植物植生調査
- ④ アメリカ合衆国デラウェア州ドーバー市中学校との相互交流

2 主な成果

全体として、地域や国際交流に対する生徒の興味・関心が高まったことと、身近な取り組みが、様々な人々

とのつながりを生み出していることを確認できたことが大きい。ESD教育の実践をとおして、生地達は広い視野に立って行動する大切さを確実に身に付けている。

3 今後の課題

教師側で、ESD教育についての理解を深めながら、それぞれの実践について、関連や連携を更に強化し、全体として系統的・発展的な実践ができるようにすること。特に、ESD教育の場合、幅広い分野に亘るので、学校内で横の連携を充実させたい。

藤山 篤（宮城県 気仙沼市立唐桑中学校）

ふるさと・エネルギー教育

気仙沼市立唐桑中学校のESDは「ふるさと・エネルギー教育」である。

「持続的・発展的な社会をつくるため、ふるさとを思いながら、夢や志、プラスの気付きをもってエネルギーについて学習し、考えを発信していく」ことを目標としている。

私たちの住む気仙沼市は、県内南50kmのところに原子力発電所をもち、北の海外線に、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物埋設センター、再処理工場などの「原子燃料サイクル施設」を望む地域にある。そ

のため、生徒たちが、原子力を含め、エネルギーを正しく理解し、学ぶことを通して、資源・エネルギー問題を考えていくことが大切であると考え。そこで、2050年、今の中学生が50歳になるころ、ふるさと唐桑のエネルギーをどのように供給し、利用していくかを考え、発信・提言していくことを主たるねらいとする。総合的な学習の時間を中心に、NPO「森は海の恋人」、東北電力等の協力をいただき、また、東北大学浅沼先生のご指導のもと、活動を進めている。

横山 秀敏（宮城県 気仙沼市立小原木中学校）

本校では、給食時における食に関する指導を中心に、保健指導や関連教科における指導、生徒会の野菜栽培の活動などと連携して、食育の観点から持続発展教育に取り組んでいる。以下は、その主な実践である。

- ① ランチルームでの全校給食では、食事の前に、生徒が献立や地場産品、食材の栄養について紹介する時間を設けている。
- ② 食後、歯磨きタイムを設けている。歯の衛生週間には栄養士と養護教諭が保健指導を行ったり、検診

の際に歯科校医から講話をいただいたりしている。

- ③ 鮭・鱒増殖協会の協力を得て、家庭科で地元産の鮭を使ってさばき方を指導いただいたり、調理実習を行ったりしている。
- ④ 給食に野菜を納入している地元農家団体の協力を得て、生徒への講話と学校農園でのこんにゃく芋の植え付けを指導いただいた。収穫後、本団体の指導でこんにゃくに加工し、文化祭で販売する予定である。

宮城県 気仙沼市立面瀬中学校

本校では、持続発展教育（ESD）へのアプローチとして、校内研究を中心とした取り組みを行っている。研究主題を「持続可能な社会を担う生徒の育成～総合的な学習の時間における環境教育を切り口とした取り組みを通して～」と設定して、3年計画で取り組んでいるところである。3年間における研究計画の主な内容は次の通りである。

一年次 総合的な学習の時間において、環境を切り口とした学習カリキュラムの作成と実践及び検証
二年次 教科と総合的な学習の時間における関連性の

明確化と実践及び検証、それに伴う学習カリキュラムの改善

三年次 教育課程全般における自然・社会環境教育の実践と検証、及び学習カリキュラムの構築

本年度は、上記の二年次に当たり、総合的な学習の時間（本校では「ふれあい・創造の時間」と称している）において、一年次に構築した総合的な学習の時間での学習カリキュラムを基に、各教科と総合的な学習の時間における関連性の明確化と実践及び検証を行っているところである。

佐々木 隆行（宮城県 白石市立白川中学校）

白石市はゲーム「戦国バサラ」でも注目を集める、伊達政宗の第1の家臣、片倉小十郎が治めたところでもあります。蔵王連峰に抱かれ、自然環境に恵まれた所です。

本校は、平成20年度に「ユネスコスクール」に登録されました。「ユネスコスクール」に加盟したので、何か新しいことを始めようとは考えないで、これまで行ってきた活動を「ESD」の視点で見直し、より充実

させていきたいと考えています。その一つ、本校で伝統的に続いている「愛鳥活動」のねらいは「巣箱作りや巣箱かけ、野鳥の営巣活動の観察、渡り鳥の観察をとおして、生命尊重の態度及び自然環境の保全に寄与する態度を育成する。」です。

愛鳥活動は、1951年（昭和26年）1月にホームルームで野鳥を保護しようという意見が出され、それ以来本校の伝統的な活動として取り組んできたものです。

大屋 雄二（新潟県 新潟市立巻東中学校）

1 実践の概要と主な成果

学区は山すそに田園が広がる自然豊かな地域である。福井と隣町の岩室では、ほたるの保護活動に取り組んでいる。2つの地域では保護活動の意味合いが異なり、岩室は観光と結びついた経済的な面が多く、環境問題とは何なのか？を現地調査して比較して考えさせている。また、この福井の地域には、長岡藩に米百俵を送った三根山藩があった。この地域のお年寄りか

ら教わりながら「米俵」を作る活動を行う。作った俵は、長岡藩学区の学校へ送り、毎年行っている「演劇」で使ってもらう。

2 課題

俵を指導できる人が少なく、さらに高齢ということ、ほたるの活動では、見えてくる経済的な面から見た環境問題まで深まるための指導体制を確立できるかどうか今後の課題である。

飯島 眞（埼玉県 越谷市立富士中学校）

どのようにして教育課程全体にE S Dおよび持続可能性に関する教育を埋め込むか

1 実践の概要

今までA S Pの活動を通して主に選択的な教育を通じて持続可能性に関する教育を実践してきた。また、並行して幾つかの教科や領域においてE S Dの視点を加えた年間指導計画を作成しE S Dの実践教育を行ってきた。

2 おもな成果

実践の結果、さまざまな教科・領域をE S Dの視点

を加えて再構築し、総合的な学習の時間を通じて“知の総合化”が実現できる可能性が見えてきた。

3 課題

最も大きな課題は、持続可能性に関する教育の主幹である環境教育が、具体的な時間を確保した形で計画的に実施できないために、E S D全体が科学的根拠に基づくプラクティカルな実践としてのメリハリを欠いていることである。

大塚 明（静岡県 伊豆市立天城中学校）

1 実践の概要

総合的な学習の時間をESDの視点での見直し、ESDカレンダー(各教科・道徳・特活と 総合的な学習のつながり)の作成に着手した。

2 おもな成果

- ・ESD-Jの講師による研修を通して、職員のESDに対する理解が深まった。
- ・天城山のブナやマメ桜が枯れ始めている現状を知り、何とかしたいという課題意識が芽生えてきている。また、その原因のひとつが鹿の食害である

ことを知り、増えすぎて困っている鹿を何とかしなければという意識も生まれた。

3 課題

- ・生徒は課題意識を持っではいるが、それを解決するための具体的な方法を考え、行動に移すまでには至っていない。
- ・総合的な学習の時間と教科とのつながりを意識してカレンダーづくりを進めてきたが、まだ十分練られたものになっていない。3年間かけて、よりよいものに改訂していきたい。

井本 章子（奈良県 奈良市立月ヶ瀬中学校）

本校はへき地校、地域は少子高齢化である。子どもは郷土の宝として地域ぐるみで育てる風土である。地域、学校をあげて地域環境美化、地域福祉、地域合同事業などのボランティア活動に取り組み、自主的・自律的な活動でリーダーとして次世代を担う人材の育成を図ってきた。具体的に生徒会が中心となり地域ぐるみでアルミ缶回収活動を15年間継続して行い、リサイクル収益金で福祉機器を寄贈している。また、一人暮らしの高齢者を訪問し交流する活動も進めた。地場産

業の梅と茶の伝統文化を継承したり、文化史跡を地域の方と散策する郷土学習を進めた。花いっぱい運動では公共施設へ花寄贈、梅林清掃をして環境保護に努めている。国際理解教育では視野を広げ海外からの訪問を受け入れ交流してきた。地道なESD活動を今後はASPネットワークを活用し、郷土のよさを発信しながら地域の愛と誇りを繋げる活動やたくましく生き抜く人間の育成へと進めたい。

垣見 弘明（奈良県 奈良市立都南中学校）

1：実践の概要

2010年7月にユネスコスクールに加盟承認された本校では、国際理解の一つとして、貧困と戦争の中で生きる子ども達の支援活動を行っている。

今年で3年目になる「ペットボトルキャップの回収」や、今年から取り組んでいる「書き損じはがきの回収」などである。回収されたペットボトルキャップは、業者を介してワクチン接種の費用に充てられている。

2：おもな成果

ペットボトルキャップ回収活動は、中学校内から

校区へ、そして、地域へと広がり、今では多くの家庭、職場、学校などから本校に集まってくるようになった。この活動を通して、生徒が家庭でペットボトルのキャップを集めるようになり、ボランティアとして自分ができることを見つけるきっかけとなった。

3：課題

今後、ユネスコのネットワークを活用し、地域から全国へ、そして、世界に発信できる活動を行っていきたいと考える。

佐藤 安恵（奈良県 奈良市立平城西中学校）

本校は、奈良市小中一貫教育パイロット校に指定されており、現在、校区内の小学校と連携し、小中一貫教育を進めています。その一環として、郷土なら科という教科を新設し、実施しています。郷土なら科は小学校五年生から中学校三年生まで連続して続けられるものであり、小学校で学習した身近な地域の文化財や福祉、産業などについて、中学校でさらに理解を深めます。

本校では、この郷土なら科を各教科で培った力を発揮できる総合学習の場として位置づけ、郷土「なら」に関係するテーマに取り組んでいます。子どもたちが郷土を深く知り、郷土にさらなる愛着や誇りをもち、

その魅力を発信する力をつけることを目標に世界遺産学習、福祉学習、職場体験学習、平和学習などを進めています。特に世界遺産学習は、郷土なら科における軸となる学習であり、中学校三年間を通して行っています。また、各教科において『なら』独自の内容を取り入れた授業を行うことも行っております。

今後は、生徒が学習したことを行動に移すような力を育むことが課題であると考えています。地域でのボランティア活動等を足がかりに、地域を知り、理解することから、その保全まで視野を広げられるような態度を育んでいきたいと考えています。

奈良県 奈良教育大学附属中学校

本校では、2006年度から「ESDの理念にもとづく学校づくり」を主題に教育研究を進めてきた。ホールスクールアプローチを目指し、全領域にわたる取り組みを進めるため、ESDカレンダーを作成し、各学年の総合的な学習と教科学習を、ESDの観点から連携させ編み直す試みをしてきた。また生徒会を中心にテーマの選定、事前学習の準備、集いの企画・運営を進め、平和宣言を採択する平和の集いや、自然のつながりを学ぶ場としてのビオトープづくりである中庭プロジェクト等では、生徒と生徒、生徒と教師の協働が実践の核

になっている。

上述の実践をとおして、日々の諸活動がESDにつながることで、本校がユネスコスクールの一員であることを生徒と教員が広く認識し、それが又次の活動へのモチベーションとなっている。

ユネスコスクールの地域ネットワークづくりとその活動の活性化が、日本における今後のユネスコスクール活動とESDの浮沈にかかわると考え、奈良ではその取り組みをスタートさせたところである。

野々村 テル（奈良県 奈良市立三笠中学校）

1. 実践の概要

三笠中学校は、校区内や周縁部に世界遺産をはじめ多くの文化財が点在するという環境にありながら、地域に目を向けた学習がほとんどなかったため、昨年度より地域教材を活用していく取組を道徳を中心に始めた。そのうち2010年2月に実施した多文化理解の取組について紹介する。

（主な内容）奈良の文化を創り守ってきた中には多くの国の人が関わっていることを確認し、パワーポイントで作成した『奈良を創った、繋いだ、守った』を見た後、大津昌昭著『森川杜園の生涯』から1888年に奈良の浄教寺で行われたフェノロサの講演を描いた場面

を抜粋した教材を使って学習した。

2. 成果と課題

身近な地域の題材だけに日常生活との接点も多く、その中に新たな気づきもあり効果的であった。今後もっと地域に目を向けるとともに、様々な人権の課題を自分のものとしてとらえ、解決にむけて行動する力をつけていくことができると期待している。

また、地域教材を使った取組は道徳が中心であるが、今後さらに広げていかなければならない。

なお、今回の取組については11月28日に奈良市で開催される『世界遺産サミットイン奈良』で詳しく報告する。

松本 芳之（和歌山県 和歌山市立伏虎中学校）

カナダ姉妹都市校との国際交流

共に生きる国際交流活動をめざして

1. 実践の概要

- ・平成4年度から交流しているブリティッシュ・コロンビア州リッチモンド市の中・高等学校と隔年に訪問をしている。交流は毎年5月に行い、平成22年度は第10回目の訪問を実施した。

2. おもな成果

- ・「百聞は一見に如かず」、国内に留まっていた経験できないことばかりであり、生徒たちは、異文化・多文化の地において全てに感動し、外国語

に関心が強くなり、交流を通して友情の絆を強めることができている。

3. 課題

- ・相手の立場を尊重し、認め合う態度をどう育て、世界についての自分の考えを表現する能力をどのようにして伸ばしていくか。
- ・地球規模の課題に対し、世界の現状を知る・課題に気づき考える・自分にできることを実行するというプロセスで学習に取り組む態度を養うこと。

実践報告（高等学校）

高田 三夫（北海道 海星学院高等学校）

本校は今年7月9日付けでユネスコスクール加盟校として承認を受けました。今まで本校が大事にしてきた教育実践を基盤に、今後ユネスコスクールの持続発展教育の理念をよく理解しながら、校内体制を徐々に整えてまいりたいと考えています。

2005年から取り組んでいる大型客船寄航時の通訳ボランティアは、継続して全校生徒で取り組みます。第2学年で実施している海外研修旅行ではホームステイの体験を通じて、相互の文化的差異についての学び、国際感覚を養います。

また地球規模で進行している環境汚染の実態を定量的に理解し、今現在の我々自身の生活が環境問題とどのように結びついているかを、世界的視野で認識することを目指します。地域の大学（室蘭工業大学）や社会教育機関、NPO団体との連携・交流を通じた取り組みをしていきます。

これらの取り組みが、全体を通じて、将来の日本を担う自立的国際人の育成につながることを願っています。

岩手県 盛岡中央高等学校

本校は、環境教育と国際交流にかかる教育活動を対象としてユネスコスクールに加盟している。国際交流に関しては、本校の13の国際姉妹校を招き「第12回CHUO国際教育フォーラム」を9月2日に開催した。環境教育に関しては、ISO14001の枠組みの中でESDの理念を柱として、教科教育と生徒会活動それぞれで活動を継続している。さらに、国際教育フォーラムのテーマとして環境問題を取り上げることで、世界的な視点から自国の環境問題を認識し、環境・平和・国際協力

すべての面での持続的な取組の重要性を理解する貴重な機会を実現している。一方で、この実践は行事的な色彩が強く、生徒の日常の学校生活との関連性、取組の継続性が薄れる傾向がある。したがって、これからの課題として、国際的な視点から理解した諸問題への解決策や提言を、どのように学校の生活の中に浸透させていくかという点があげられる。教科教育や学級経営の一つのテーマとして、すべての教育活動の中への浸透を模索しているところである。

佐藤 善則（宮城県 気仙沼西高等学校）

本校におけるE S Dの実践は、二つの教育活動から成る。

一つは、理科巡検教育である。学校近隣の海岸付近の地質、化石、海浜植物の観察を通して、地域の自然環境について理解を深めることができる。また、地域の公共展示施設を見学し、地域の文化と自然の関わりに対する興味を深めることができる。

もう一つは、福祉教育である。児童福祉施設・障害者施設・特別支援学校等との交流を通して、互いの信頼関係を築き、福祉に対する認識を深め、協調性や共

生の意識を高めることができる。また、福祉の現状を知ることにより、福祉の意義や課題について理解することができる。

いずれの教育活動も高い成果を上げているが、理科巡検の課題として、より発展的な活動を巡検実施後に行う余裕がない点が挙げられる。また、福祉教育の課題として、福祉類型と社会福祉部に所属する一部の生徒が活動の母体であり、その性質上、生徒全体に広げることが難しい点が挙げられる。

徳能 克也（宮城県 仙台二華中学校・高等学校）

本校では、地球環境を大きなテーマとしたIS（インターナショナル・スタディ）及びSR（サイエンティフィック・スタディ）を、特色ある教育活動として総合的な学習の時間の中に位置づけています。これにより、地球的視野で主体的に思索を深め、他者とかわりながら問題解決に取り組める真の国際人の育成に努めています。

ISにおいては、地球環境をテーマとして、人文・社会科学的な考え方や手法で探究しています。EUやJICA等から外部講師を招いての講演やゼミナール等を

とおして、異文化や国際協力についての理解を深め、国際的な視野を広げています。またシンガポールの海外研修を目指して、「地球環境」について外国人と話し合える力を育てます。

SRにおいては、地球環境をテーマとして、自然科学的な考え方や手法で探究しています。泉が岳や網地島でのフィールドワークをとおして自然環境を全身で感じ取った上で、実験・実習・討論・発表を繰り返し、科学的に見る力と問題解決力、表現力を高めています。

大野 満奈（埼玉県 国際学院高等学校）

本校は、毎年約60名の生徒がカナダの大学で語学研修に参加している。教員を含め参加者全員は2週間程度のホームステイが義務付けられる。つくられた体験ではなく、何が起こるかかわからない実際の生きたカナダ生活を体験するからこそ感動と学びがある。カナダ語学研修の際、多文化との関りについて大学教員からその精神と、生活するうえで必要となるマナーや心構えの説明を受け、Royal British Columbia Museumを訪問し先住民文化の展示によりファーストネーション

ズの暮らしを学んでいる。生徒達はカナダの人々との交流を通じ、互いの文化を知り、価値観を理解し、伝え合おうと試みる。我々は僅かな影響力しか持たないが、世界の人と人をつなぎあわせるという教員とも引率者とも違う役割が付加される。今後はカナダだけでなくもっと他国の文化とも触れあい、多文化共生理解への糸口を提供するため、数々の取組みを通じESDを実践していく予定である。

朝日 眞由美（千葉県 千葉県立市川西高等学校）

千葉県立市川西高等学校は、昨年12月にユネスコスクールへの加盟申請を行い、今年の7月9日に承認されたばかりの学校ですので、まだ実践らしい実践は行っていないですが、現在取り組みを始めている「ESDと防災教育」について紹介させていただきます。

本校は正門前を流れる「春木川」と裏門前を流れる「国分川」の二つの川に挟まれた場所に位置しています。この環境を利用して、河川における環境教育と、水害調査に基づく局地的大雨や集中豪雨を想定した防

災教育に取り組み、ESDにおける環境学習の発表を以下のような機会に行いました。

- (1)地域フォーラムで「環境について」の生徒発表
- (2)市川市総合防災訓練（防災ひろば）にて「ESDと河川氾濫を想定した取り組み」を生徒が発表
- (3)9都県市合同防災訓練に40名の生徒参加
- (4)本校文化祭にて、水害対策の啓発活動（水害事例のポスターセッション・洪水ハザードマップの普及活動・防災意識アンケート調査）を実施

望月 浩明・海老名 雅己（神奈川県 神奈川県立有馬高等学校）

神奈川県立有馬高校は各学年に1クラスずつ外国語コースを設置し、国際的視野をもつ生徒の育成を目指しています。また、各学年に10名の在県外国籍生徒の特別募集枠を設けており、現在、中国、ベトナム、台湾、ペルー、ブラジル、ドミニカなどから来日した生徒が学んでいます。

こうした環境のもと、国際理解、多文化共生に係わる教育プログラムを実施しています。

(1)海外修学旅行…サイパン（2回）韓国（2回）、グアム（今年度予定）修学旅行を2学年時に実施し、その際、現地高校を訪問し交流活動を行ってきました。

(2)姉妹校交流…米国インディアナ州の高校と隔年で相互訪問をしており、毎回15名ほどの生徒がホームステイをしながら交流活動を行ってきました。

(3)総合学習……日本ユネスコ協会連盟のDプロジェクトに参加し書き損じハガキ募集のリーフレットを作成。また、水田を農家から借りて田植えから稲刈り精米までを自分たちで体験する活動を行っています。

(4)文化祭……世界遺産保護活動のパネル展示や国際ボランティア活動の体験報告展示、国際赤十字運動のパネル展示などを行いました。

山中 啓子（大阪府 大阪府立住吉高等学校）

1. 実践の概要

2010年8月大阪のユネスコスクールネットワークの初めての取り組みとして、府下のユネスコスクールの教員、生徒が集まり、1泊2日で「学びの交流会」を実施した。大・中・高・小合わせて17校、121名、海外からも3名が参加し、ESDに関するワークショップを行った。

2. 主な成果

小・中・高・大という異年齢の子供たちや海外の学生が一堂に会する機会を作ったという意味でも有意義であり、本校から参加した8名の生徒（うち1名はタ

イからの留学生）は、小学生のプレゼンや大学生の考え方をはじめとする多くの刺激を受け、自分たちも頑張らなくては…という思いを強くしたようだ。また、教員にとっても他校の活動を知り、課題や経験、苦労や喜びを共有できる機会となり大変実りのある場となった。

3. 課題

今後は、今回参加できなかった他の生徒や他の学校、地域の人々などにも呼びかけ、また、NGOやNPOと連携を図りながら活動の幅を広げていきたい。

内本 雅之（大阪府 大阪府立長野高等学校）

1：実践の概要

ASPnet校として承認を受ける以前から実践してきた国際理解教育が本校におけるESD実践の中心です。

- ①オセアニア州にて実施するホームステイ研修をはじめ、米国や英国での海外研修。
- ならびに報告会。
- ②海外からの帰国生徒の受け入れと学習支援。
- ③海外からの長期・短期の留学生の受け入れ。
- ④海外への長期留学生の送り出し。
- ⑤地域の外国人による国際理解講演。
- ⑥大学の留学生を招いての国際交流会。
- ⑦豪国にある姉妹校との交流。
- ⑧外交官講演会。
- ⑨フィリピン・スタディ・ツアー報告会。

⑩ESD国際カリキュラムの授業。

⑪ユネスコ同好会によるボランティア活動とフェアトレード展。 他多数

2：おもな成果

生徒が自文化中心主義から脱却して、文化を相対的に理解することが徐々にできるようになってきました。自らの態度・振る舞いを見直すことも少しできるようになりました。

3：課題

ESDの理念を職員全体で共有することが最大の課題です。

米田 謙三（大阪府 大阪私立羽衣学園高校）

学校間交流

1) 実践内容： 昨年実施分 ①EFA（日ユ協・ACCU他）識字問題ポスター作成を、授業で実施。教育の大切さの意義を学びハガキや募活動実施。②国際環境（大阪大学・米国NJ州教委会）米国・シンガポールの生徒と、“同時学習”を実施。遠隔対話システムを活用して環境問題や文化理解について学び合い。③修学旅行 大学の先生によるオーストラリア修学旅行に備えての約8講座（ESD）を受講。④地域遺産 地域の文化や自然を守り伝えるために、デジタル・スライドショーを作成。特に京都上賀茂神社の葵プロジェクトと連携し、校内で葵も

育成。⑥国内海外ASP連携 アジア北欧高校生会議を継続。中国の学校と共通に学んだESD教材を元に英語プレゼンを作成し発表。また大阪地区内で小中高大で学び合い。

2) 成果：世界が抱える課題に向き合い、様々な地域の文化や人々の暮らしを知ることができた。「自主的に活動すれば地域を動かせる」という実感とともに組織活動を展開できた。

3) 課題：集団の教育力をさらにいかすために、地域や海外をさらに巻き込むための体制の確立。

山田 正人（大阪府 大阪府立松原高等学校）

実践例

- 1) ピースワークショップ（7月）
- 2) 韓国研修旅行（2学年全員）（9月）
- 3) 人権の集い（1・2年全員）（2月）
- 4) 海外スタディツアー（有志）（3月）
- 5) 「高校NPOまなびネット」のイベント
 - ①異文化理解講座（10月）
 - ②松原ワールドフェスタ（11月）ほか。
- 6) 授業例
 - ①総合学科設定科目「ワールド・ウォッチング」
 - ②地域の施設で、保育実習&介護実習
- 7) 課外学習の例（一例である。）
 - ①菜の花プロジェクト（松原ARISSスクールコ

ンタクトなど）

②るるく

- 8) ピアカウンセラー養成講座：人間関係トレーニングの講義・実習を受けて実践。
- 9) 地域連携：ふれあい運動会・ふれあい交流会・中学校校区ごとの祭り・作業所の祭りなど多数。

主な成果

自分で考え、調べ、人前で発表する力をつけている。

課題

学校行事、地域のイベントが多く、一部の生徒への負担の偏りがみられる。

大島 弘和（大阪府 大阪府立北淀高等学校）

本校の生徒は、多様な生活背景を持ち、学習面を含む様々な課題を抱えている。そのような生徒の、高校生活を頑張ろうとする思いを支え、自ら進路を切り開く社会人、社会の一員であるという自覚を持った市民として育成することのできる学校であるために、あらゆる場面で自尊感情の育成を図り、生徒が自ら考え学ぼうとする意欲、様々な課題に前向きにチャレンジする意欲を作り出すことが本校の課題である。従来、留学生との交流や識字・開発教育等の国際理解教育を、

ユネスコスクール活動の中心としてきたが、ESDの視点から現在の教育のありようを再検討し、学校教育活動のすべてがESDの理念にかなった活動であるように位置づけていく。そのため、校内のASP委員会は、行事の企画立案に加え、学校教育がESDとの関連があるのか、有効であるのかを検討する機関へと性格を移行しつつある。とりわけ、基礎学力の充実とコミュニケーション能力の育成にESDの視点を結びつけたい。また、生徒の変容に敏感でありたい。

松本 真紀（奈良県 奈良県立法隆寺国際高等学校）

1. 実践の概要

英語科目での取り組み（英語で行なう授業）

- ①「イマージョン英語」（3年国際英語科）において、環境問題を扱う。本年度のテーマは、「ボルネオ島の環境と私たちの暮らし」。講義形式の授業・調べ学習で学び、自分たちに何ができるか考える。学期ごとにグループ発表をし、年度末には学習成果発表会で発表し、成果を示す。
- ②「異文化理解」（2年国際英語科・国際教養科）において、世界遺産を扱う。さまざまな世界遺産について、また、世界遺産を通してその国の文化的背景・歴史を学ぶ。

2. おもな成果

①遠い国での問題が実は自分たちにつながっていることを学び、自分たちの生活を振り返り、課題の克服に努めようとしている。

②「世界遺産を通し、その意義とともに、知識を増やし、世界への関心を高めている。

③「また、英語で行なう授業であるため、英語も自然に身につけられる。

3. 課題

特定の科目のみでの取り組みであるので、学校内での周知、他科目・教科との連携をどうするか。

兵庫県 神戸市立葺合高等学校

1 実践の概要 2 おもな成果 3 課題

1 環境と国際理解をテーマにして、総合的な学習の時間に、日本語・英語を使ってプロジェクト学習を行っている。阪神大震災を経験した神戸の高校生として、環境問題や防災について学びを深め、地域社会に役立つ活動に取り組むと共に、海外の高校生とも意見交換をして、国際社会に貢献できる“生きる力”を育てることがねらいである。

2 学校周辺を歩いて防災マップを作成し、住民と共有できるようにGoogle Mapで公開したり、自作の防

災学習ゲームを持って小学校へ出向き、子供たちが楽しみながら学べるものを開発して、地域の防災意識を高めようとしている。また、イランや台湾の高校生とメール交換やビデオ会議を行うことで、互いの取り組みから学びを深めている。環境問題に関して海外の高校生と各国の問題点や活動を学びあい、若者が一緒にできることを提案しようとしている。

3 海外の高校と共同プロジェクトを行う場合、長期休業の時期の違いで、連絡が取れず活動がスムーズに行えないことがある。

坪野 賢一郎（和歌山県 和歌山県立古座高等学校）

本校では、郷土を愛する心と国際社会に貢献する姿勢や資質を育成することをねらいとして、総合的な学習の時間を中心に「世界遺産教育」を実施している。

地域の自然や文化遺産について調べ、フィールドワークを行うことにより、地域の文化遺産や環境に対する関心は大いに高まったといえる。また、グローバルな視点で考察し、「自分たちが今できることは何か」という意識を持って行動できる生徒が多くなるとともに、地域の文化財や自然環境を対象としたカリキュラ

ムを検討する中で、教員のESDに対する理解が深まったことが成果である。

この取組を継続するための校内におけるシステムや組織作りと、地域の他の学校へ取組を紹介し、ネットワークを構築していくことが課題である。地域の各学校がESDという同じ課題意識を持ち、それぞれの学校で現在行われている教育活動をESDの視点で再構築することによりネットワーク作りが可能になると考える。

森 泰三（岡山県 岡山県立岡山一宮高等学校）

1. 実践の概要

岡山一宮高校は、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールに指定されている。その目標は地域貢献・国際貢献できる人材を育成することがあり、達成のためにESD活動を教育研究開発の各分野に位置づけている。

2. おもな成果

学校設定科目「科学技術リテラシー」・「課題研究」では、身近な地域の社会及び自然環境問題を考えさせ、課題解決に向けた見方・考え方を身に付けさせている。昨年度の課題研究では、環境に負荷をかけないセル

ロース系バイオマスの糖化を行うための触媒を開発することができ、岡山県から特許申請を行ったり、ISEFへの日本代表となったりした。

海外研修参加した生徒は、国際貢献の現状と課題を理解でき、将来国内外での貢献をすることを強く望んでいる。

3. 課題

各事業を全体計画にそれぞれ位置づけているが、それを生徒や教職員全体で認識すること、また、取り組んだ成果をより広く普及・広報することなどが課題である。

室 貴由輝（岡山県 岡山県立矢掛高等学校）

1 実践の概要

矢掛高校では、学校設定教科「環境」を開設している。教科「環境」には「環境基礎」「環境演習Ⅰ」「環境演習Ⅱ」「環境科学」の4つの科目を設け、身近な環境問題から地球規模の環境問題まで幅広く学習し、持続可能な社会とは何か、持続可能な社会の構築に向けて自分達に出来ることは何かを考えさせる授業を展開している。さらにこれらの授業で得た知識を深化させ、具体的な事象との関係性を認識させるために「白石島ESDプログラム」などの希望者を対象とした行事も実

施している。

2 おもな成果

教科「環境」の活動をとおして、どうすれば持続可能になるかという考え方ができる生徒が増えてきた。また様々な問題を解決するためには、多くの教科の知識が必要なことに気付き、学習意欲や学力を高める生徒も増えている。地域と連携した新しい取り組みも生まれ、期待される学校になりつつある。

3 課題

活動の評価方法の確立。指導体制の確立と継続性。

岡山県 岡山県私立岡山龍谷高校

本校普通科進学教養コースでは、文理、看護福祉、保育・初等教育、栄養家政、芸術・スポーツという生徒の興味関心に合わせた5つの講座を週4時間開設しており、実習や野外活動などの体験的な学習を主としている。その目的は生徒の進路意識を高め、地域や大学をはじめとした周囲と交流し、体験的な活動を行うことにより、主体的に考え行動できる生徒の育成を目

指している。また、その評価方法としては本校で打ち出している「R学志力」の評価規準に基づき、生徒の自己評価と教員側の評価に基づいている。「R学志力」とは経済産業省の提唱する「社会人基礎力」に基とし、「自己管理能力」「他者理解能力」「課題発見能力」「意志決定能力」「自己表現能力」という観点での生徒の成長を目指すものである。

奥田 浩久（広島県 広島県立尾道北高等学校）

1 実践の概要

テーマ「留学生との交流をととして、主体的に行動できる人材の育成を目指す」

(1)ドイツ人、フィンランド人留学生の受入れと交流

①日 時 平成22年7月16日

②訪問者 ドイツ 1人、フィンランド 2人

③内 容

【地理】

・留学生によるプレゼンテーション

テーマ「私の国」（事前に依頼）

・内容について生徒が質問、その後、クラスを3班に分けて意見交換

【書道】

・本校生徒と一緒に受講。ホスト役は本校生徒

(2)中国人留学生の受入れと交流（予定）

①日 時 平成22年10月15日～17日

②訪問者 中国 23人

③内 容

15日 生徒と行動を共にし、授業・部活動を体験する。夜は生徒宅にホームステイ

16日 午前 ホストファミリー等による尾道観光
午後 交流会生徒実行委員と、野外炊飯、交流会を実施し、施設に宿泊。

17日 委員会の生徒とともに地域の秋祭りへ参加。

2 主な成果

・流暢な英語で自国のことを話す留学生を見て、外国に対する知識欲が湧くとともに、日本人としての在り方について考察した生徒も多くいた。

3 課題

・生徒がより主体的に行動できるような準備と実践



留学生によるプレゼンテーション



書道の授業風景



記念写真

向井 緑（広島県 広島県立呉三津田高等学校）

本校では「総合的な学習の時間（通称GAYA）」において、各学年のシラバスを作成し、生徒の発達段階に応じたESDの取り組みを行っている。

1・2年生では、読書会やディベートなどを通して、現代社会の諸問題について自ら知識を深め、協議し、発表する技術を学ぶ。ディベートでは「地球温暖化を防ぐために、原子力発電を推進すべきである」などの論題を設定して討議を行い、その様子を広く地域に公開し、好評を得ている。3年生では、これまでの学習

をふまえて地域社会の抱える課題を主体的に把握し、その解決のために何ができるのか、活発に議論し文章にまとめている。

これらの活動を通して、生徒たちは問題解決能力、コミュニケーション能力を高めており、仲間と協調して活動することの楽しさも見出しているようである。

今後とも、教職員間で意識を共有し、シラバスの改善を行いながら、本校におけるESDの深化を図りたい。

藤原 隆範（広島県 広島大学附属中・高等学校）

①実践の概要……2007年度より全教科・全学年でESDの授業づくりに取り組んできた。教科の実践は、各教科と「総合的な学習の時間」を使って、各学年の実践は、中学は「道徳」と「学級活動」で、高校は「ホームルーム活動」で実践してきた。自然と人間との「共生」をはかり、世代内の「不公平」・世代間の「不公平」をなくすため、「新しい平和の文化」の創造の担い手をつくることを、ESDの目標とおいている。各教科での実践を重ねながら、教科を超えて、複数の教

科でチーム・ティーチングでの授業実践を試みている。

②成果と課題……「化学」と「政治経済」、「社会科」と「家庭科」でコラボレートして、チーム・ティーチングでESDの授業を行った。文系と理系、マクロレベルとミクロレベルの双方向からのアプローチで「持続可能性」について考えることができた。ESDの授業と生徒会活動・クラブ活動をどのように有機的に結合させるか、課題である。

二宮 浩司（福岡県 福岡県立城南高等学校）

本校は、本年度からユネスコスクールに加盟し、環境教育と国際理解教育を中心にESDを推進していくことにしました。従来の人権教育や地歴科・公民科の授業での取組に加えて、学校行事や「総合的な学習の時間」を活用した実践を始めており、環境教育では、講演会や施設見学の他、海外の大学・高校と連携したインターネットテレビ会議や海外スタディーツアーに取り組み、また、国際理解教育では、『ユネスコ寺子屋プロジェクト』への参加や、講演会、海外修学旅行な

どを通じてESDに取り組んでいます。

これらの実践を通して、生徒の関心の喚起や理解の深化はある程度達成できたと思います。しかしながら、生徒の体系的な思考力や問題解決能力の育成までには至っていません。今後は、ESDを本校の教育活動全体で体系付け、単に知識の伝達にならないように、生徒の自発的な行動を引き出し、体験や体感を重視した参加型の実践を考えているところです。

濱田 幸裕（福岡県 福岡県立武蔵台高等学校）

1：実践の概要

活動テーマは『国際理解／異文化理解』と『地域歴史文化理解』：【平成21年度】校内ユネスコ委員会の創設、ユネスコスクール講演会3回実施、海外派遣研修開始、地域歴史文化フィールドツアー（宗像・沖ノ島関連遺産群）開始。【平成22年度】世界一大きな授業、EUがあなたの学校にやってくる、グリーンウェイブ、ユネスコ寺子屋プロジェクト教員海外研修inカンボジア、地域歴史文化フィールドツアー（in 太宰府&筑紫野）、筑紫野市の里神楽「山家岩戸神楽」の校内実演

鑑賞、ユネスコスクール研修会in福岡での実践事例発表。

2：おもな成果

大陸との交流の中で学校所在地の筑紫野が果たして来た歴史的役割に対する生徒の理解が深まった。

3：課題

実質の活動期間は1年余りで教師主導の面が強い。内容を精選しユネスコ委員活動を充実させ、生徒の自主性を活かした内容に移行させるための工夫が必要。

実践報告（中高一貫校）

西山 竜男（北海道 登別明日中等教育学校）

国際理解教育・外国語教育の重視

1 実践の概要

(1)教科・科目等における取組

○イマージョン・プログラムの導入（英語以外の一部の教科・科目を英語で学習）

○中国語、ハングル、英会話、国際観光学の開設

(2)語学体験研修等における取組

○イングリッシュ・キャンプでの英語漬けの宿泊学習

○プリティッシュヒルズ（福島県）での語学研修

○小学校の外国語活動への協力

○海外見学旅行（アメリカ・カナダ）でのホームス

テイ及び姉妹校交流

(3)その他の取組

○世界食料デーの地域実行委員会の取組への参加

2 主な成果

英語等を用いて、他国の人々との連携を図りながら、異なる習慣、伝統、価値観に対する理解を深めることができるようになった。

3 課題

ユネスコスクール加盟校のネットワークを活用して、国内はもとより世界の人々との交流を深め、情報や体験を分かち合うことができるようにする。

滝田 貴紀（新潟県 新潟県立燕中等教育学校）

本校は、E S Dの一環として「国際理解教育」と「環境教育」を中心に据え、学年毎に「地域を知り、地域から学び、世界を知る」様々な活動を展開している。

例えば、1年次には地域の伝統工芸「鋳起銅器」の制作学習を通して、地域の伝統産業の歴史や価値を学び、また地域エコ学習としての電力会社や製紙工場への訪問を通して、企業利益と環境対策のバランスの大切さについて理解を深め、2年次の「つくば科学の旅・種子島修学旅行」では、日本の最先端の宇宙科学技術

に触れるとともに、地球規模・宇宙規模での環境問題について学ぶ機会としている。さらに4年次には、オーストラリア研修旅行を実施し、異文化体験と英語によるコミュニケーション実践を行っている。

今後は、様々な取り組みを系統的にそして継続的に実施すると共に、生徒自身の手で学習成果をまとめさせ、その内容を積極的に地域に発信していきたいと考えている。

北原 りゅうじ（千葉県 渋谷教育学園渋谷中学高等学校）

本校の全教育活動は、持続可能な国際社会を築くリーダー育成を目標に実施されている。

ESDに不可欠な地球規模の視野は、豪州、中国、ベトナムなど様々な国の人々との交流を通し育てている。また、各教科で、環境、エネルギー、貧困、平和、その他の国際問題などを学ぶ際は、自調自考→行動→発表という過程を重視している。各学年、現地集合で日本史的に重要な地で研修を行なっているが、それもこのプロセスに基づき進められる。

その結果、自主性と国際性、発信力に富む生徒が多く育ち、生徒会やESD関連の部活動だけでなく、各人が進んでESDに取り組むようになった。特に発展途上国が抱える問題解決に対する活動が目立つ。今年の学園祭では例年の寺子屋運動やAIDS撲滅運動に加え、有志によるAIDSについての劇が盛況であった。

ESDを深く理解し、より高い意識を持つ人材を育てるためには、教科横断型授業をさらに充実させることが今後の課題である。

北尾 悟（奈良県 奈良女子大学附属中等教育学校）

本校は20年前より「総合学習」（奈良・環境・世界・生活など）の実践の歴史を持っているが、新指導要領実施を前に、WHE・ESDの理念の下にそのカリキュラムや内容を再編・統合するプランの作成を終え、2010年度より実施することになった。

新カリキュラムにおける総合学習の内容再構成の理念的支柱は、ユネスコのESD（持続可能な社会の構築のための教育）である。現代的・世界的な諸課題解決の理念を総合学習再編の内容的な支柱とした。一方方

法的な側面は、本校の総合学習の歴史的成果を踏まえた。本校の「総合学習」は、「自主的・体験的学習による多様で多面的な学習」として行っているもので、生徒の自発的な探求心により、生徒たち一人一人が主体的に追究学習していくことを目指してきたものである。

ESDの実現は、学習内容と学習方法が両輪となって達成されることを提起したい。

松本 雅樹（広島県 広島県立広島中学校・広島高等学校）

1 実践の概要

本校は、教育活動全体を通して「人間性」を育む観点及び「関わり」を尊重する観点を重視し、次の①～③をねらいとして、従来の取組みのESD化を進めている。

①総合的な学習の時間：自己の生き方や多面的考察

②各教科：地球的諸課題の認識

③特別活動：文化的多元性の理解

2 おもな成果

☆世界の文化や言語等の関心が高まった。

☆総合的な学習の時間の「卒業研究」では、ESDに

関連する領域を扱うものが増えた。

☆中学校の特設教科「ことば科」により、論理的思考力・表現力が向上し、全国学力・学習状況調査で成果が上がっている。

☆文化祭において、外国文化の理解や模擬体験を積極的に行っている。

3 課題

①PDCAのマネジメントサイクルで評価のあり方を工夫する。

②生徒の「行動」を促す取組をさらに充実させる。

③ESDとしての系統性を高める。

実践報告（大学）

小林 亮（玉川大学）

国際的視野を基本に地域の実態に即した創意・工夫あるESDの推進を

玉川大学教育学部は、2008年10月にユネスコスクールに加盟しました。教員養成校としての伝統を生かし、多摩地区、横浜市、川崎市、相模原市など近隣の公立小中学校、教育委員会、ユネスコ協会等と連携しながら、ESD地域コンソーシアムの構築を進めています。学校でのESD活動を支援するため、「ユネスコスクール支援大学間ネットワーク」(ASPUnivNet) に加盟し、大学間連携を推進しています。2009年度より文部科学省の「日本ユネスコ パートナリシップ事業」の委

託を受け、2009年12月と2010年8月に「ESD地域ワークショップ」を開催し、地域連携を深めました。本年12月18日には、「ESD地域フォーラム」を開催予定です。課外活動としてのユネスコクラブでは、10月16日開催の「さがまち学生環境シンポジウム」など、ESDにおける近隣諸大学との交流と連携を進めているところです。今後はアジア太平洋地域のユネスコスクールとの交流や協力も強化してゆきたいと考えています。

松岡 守（国立大学法人 三重大学）

三重大学は、昨年8月にユネスコスクールの認定を受けました。本学は5学部からなり、クラブ活動等も含め様々なユネスコスクール的な活動をしてきていると言えます。2月1日に全学体制の三重大学ユネスコスクール委員会を発足させ、これまでの活動をあらためてユネスコスクールの活動として捉え直し、さらに展開させていく体制を整えました。本学はユネスコスクール支援大学間ネットワークのメンバーでもあり、両活動を一体化して進めています。

2月13日に、「ユネスコスクール研修会／シンポジ

ウムin三重」を開催、学内外合わせて約百人が参加しました。基調講演「日本のユネスコスクールの現状と課題」、三重県内の小中高大のユネスコスクールの活性化に向けての参加者の意見交換会を行いました。また学内外におけるユネスコスクールに係る活動についてのポスター発表を行いました。

10月9日には世界遺産である熊野古道にバス2台で出かけ、世界遺産を見つつユネスコスクール活動について考える研修会を開催しました。

実践報告（その他）

太田 和見（京都府 NPO 法人 京田辺シュタイナー学校）

本校ではカリキュラム全体がESDの要素を含んでいる。芸術家の方々を講師とする日本独自の工芸（陶芸、金属加工、表装等）の授業、世界遺産の訪問、お水取りのための「竹送り」への参加など、様々な体験を通して児童・生徒は自国の文化の重要性を感じ、未来に継承すべきという意識を持つ。自然・環境学習については、体験、実験を伴う自然科学の授業のほか、3年生の生活科、高学年、高等部での研修や、農場実習、福祉実習、労働体験実習などを行う。また本校におい

ては中国語、英語という二つの外国語を学び、欧米、アジア、オセアニアなど世界各地のシュタイナー学校との交流、交換留学などを通して世界への関心を広げ、異文化理解を深めている。体験を重視した学習、社会における実習の機会を通して、子どもたちの中に未来の持続可能な社会の担い手になる自覚と責任を育んでいる。NPO法人という形であるため保護者への経済的負担が大きいことが課題である。

ランチョンセッション（協力企業による社会貢献活動紹介）

11:40～12:30

カシオ計算機株式会社

CASIO.

「命の授業」の取り組み

持続可能な社会の実現を望み、2007年6月に立ち上げた出前授業：「命の授業」は、小学校を主体に、2010.10.21現在で67校、2,874名を数えました。「命の大切さ」を伝えることで、子どもたちの意識を喚起し、社会不安及び地球環境破壊と言う悪循環を、将来のリーダーたる子どもたちが断ち切っていくことへの思いに馳せております。又、「真実」を伝えることで、「気付き」を、“本気で語る”ことで、「意識の醸成」を、そして、“変革を促す”ことで、子供たちの「行動」を喚起することを目指したものでございます。本授業は公開されるケースが多く、父兄の方々との触れ合いも通じ、大人社会への発信も同時進行しております。私たちの全ての生活活動の根底にある「命」を意識することが、真の持続可能な社会実現への糸口となり、広く社会に浸透することを期待し、今後も積極的な活動を展開して参ります。

<問い合わせ先>

カシオ計算機株式会社 CSR推進室 若尾 久

TEL:03-5334-4901



サンウエーブリフォームショップ R&B

R&B サンウエーブ
リフォームショップ

サンウエーブリフォームショップR&Bは、台所を中心とした水回りの住宅設備機器メーカー、サンウエーブが認定する地元根拠した優良リフォーム会社の集まりです。本年より「次世代教育支援」として、台所を通じて、家族や働くことの大切さを学習する教材キット『台所(キッチン)で遊ぼう、学ぼう』をNPO法人日本持続発展教育推進フォーラムと協働で制作いたしました。一番身近な生活の拠点である『台所(キッチン)』を「食事をつくる」場から「約束や決まりを守る」「働くことの楽しさを知る」、さらには「食文化を学ぶ」「健康管理を学ぶ」場へと発展させ、「勤労の喜び」「家族の一員としての役割の自覚」「食や健康の重要性」など、ESDの理念でもある、『持続可能な社会を担う』一員として、「家族との暮らし=生きること」の重要性を実感してもらうことを目指しています。教材は9月より、全国の小学校を対象に配布を開始しております。

<問い合わせ先>

サンウエーブリフォームショップR&B 教材事務局

TEL:03-5565-5695



写真提供：(株)教育新聞社

積水ハウス株式会社



積水ハウスは環境省認定「エコ・ファースト企業」として、環境大臣と交わしたエコ・ファーストの3つ約束に基づく教育プログラムを用意し、教育支援活動を行っています。

約束1：生活時及び生産時のCO₂排出量削減を積極的に推進します

→実験を通じて暮らしの断熱性能について学ぶ、キャプテンアースの「いえコロジ」セミナー

約束2：生態系ネットワークの復活を積極的に推進します

→座学とフィールドワークを通じて、生態系の大切さを学ぶ、「Dr.フォレストからの手紙」

※なお、「Dr.フォレストからの手紙」はどなたでも教材をダウンロードできます。

<http://www.career-program.ne.jp/sekisuihouse.html>

約束3：資源循環の取り組みを徹底的に推進します

→当社の資源循環センターで「3R（リユース・リデュース・リサイクル）」の大切さを学ぶ「リサイクラー長官の宝探しツアー」

また、弊社のCSR・環境に関する様々な取り組みについては、「サステナビリティレポート2010」でご紹介しています。以下のURLをご参照下さい。

<http://www.sekisuihouse.co.jp/sustainable/2010/index.html>

<問い合わせ先>

積水ハウス株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 CSR室 担当：柏尾

〒531-0076 大阪府大阪市北区大淀中1丁目1-88 梅田スカイビルタワーイースト

TEL:06-6440-3440 FAX:06-6440-3369



全国農業協同組合連合会

全農

今年は国連生物多様性年です。JA全農では、経営理念の一つである「地球の環境保全に積極的に取り組みます」にもとづき、環境SR活動の一環として「田んぼの生きもの調査」に取り組んできました。水田は、単にお米を生産するだけでなくメダカやドジョウ、カエルなど多様な生きものを育てられました。この活動は、田んぼに足を踏み入れたときの水の冷たさや風の涼しさを実感し生きものに触れることから生物多様性の意義やいのちをいただくことの大切さを五感をフル動員しつつ考えてみようという活動です。このほかにも野菜の植え付けと収穫を行なう「JA全農農業体験ツアー」、食材について学習したり、調理実習を行なう「JA全農親子料理教室」など農・食・環境をつなぐ活動に取り組んでいます。

<問い合わせ先>

全国農業協同組合連合会（JA全農）広報部広報SR課：渡邊、山崎

〒100-6832 東京都千代田区大手町1丁目3番1号

TEL:03-6271-8056 FAX:03-5218-2506



ソーケングループ



ソーケングループは、木材や竹などを活用しオフィスや美術館の内装を担当する物創りの会社です。木材などを扱うことから間伐材の有効利用などにも取り組んでいます。造作家具や内装工事によって出される廃材を有効活用した玩具を作り、4年前から児童福祉施設等へプレゼントを続けています。この玩具づくりや間伐材の取組みがソーシャルビジネスに発展しています。施設の子供達との出会いを通して衝撃を受けたことは「施設の老朽化」、次に「大人への警戒心」などで、施設の老朽化については、当グループのソーシャルビジネスの売上金を活用し改修を予定しています。心の問題とペットの殺処分を取り上げ、人間のエゴによって消えていく命と傷ついた子供たちを重ねあわせ、映像を作りました。それが短編映画「OROKA」です。今後は、学校などで上映会を実施し子供たちと命の大切さについて、多くの人に伝えていきたいと考えています。研究大会でもソーシャルビジネスから短編映画製作までの歩みをご紹介します。

<問い合わせ先>

ソーケングループ

〒135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 東陽駅前ビル11階

e-mail:tsuji@ceed.co.jp 担当：プロシード株式会社/辻岳仁(ツジタケヒト)



ダノンウォーターズオブジャパン株式会社



ダノンウォーターズオブジャパンは、Volvic「1ℓ for 10ℓ」プログラムを通じ、「ボルヴィック お水の教室」を、NPO法人「Waterscape」と共に、主に小学生向けに展開してきました。世界には水の色を「茶色」「黄色」等の色と思っている子どもたちが数多く存在します。世界の子どもたちが置かれている水の状況を知るきっかけとなり、水問題への関心が高まることを目指し、小学校へ出張授業、朝小サマースクールなどでのイベントや、一部の店頭などで、教室を開催してきました。

これまで行ってきた出張授業等での経験を活かし、小学校中高学年の授業で活用していただける教材（ペットボトルでつくる「ろ過実験」、現地の生活に密着した映像を見ながら学ぶ「日本とマリの水とくらしクイズ」、水問題の現状と解決策を学ぶ「カルタゲーム」など）の開発を進めております。来年度の授業には活用していただけるように、現在、準備を進めているところです。

<問い合わせ先>

Volvic「お水の教室」教材事務局

e-mail: water@ellesnet.co.jp TEL:03-3545-3651



P&Gジャパン株式会社



P&Gは、世界で事業を展開する生活消費財メーカーであり、日本ではアリエールやパンテーンなどを展開しています。経営理念の一部としては、持続可能性を掲げ、社会貢献に力を入れています。特にESDについては企業の特徴を生かしたプログラム「P&G 水と生活の環境教室」を、小学校での環境教育推進に貢献する活動として展開しています。

プログラムの内容は、学習指導要領をもとに構成し、実際の学校の授業との関連づけながら、当社が培った水の知識を組み込み、総合的に目と体で感じながら学べる内容となっています。

プログラムの内容は、本社のある兵庫県で2008年より社員の無料出張授業がスタートし、本年より、工場のある群馬県高崎市でも開始しました。また2009年から全国の小学校向けに、授業用パワーポイント・テキスト・学習の手引きの無償配布事業を継続しています。

現在、兵庫県下の小学校で66校4,600人、高崎市で4校300人に向けて出張授業を行い、全国で121校26,000人に学習セットを配布しました。

今後、本プログラムを当社の社会貢献活動の中心として、拡大したいと考えております。

<問い合わせ先>

プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン株式会社

エクスターナルリレーションズ：森川

〒658-0032 兵庫県神戸市東灘区向洋町中1-17

TEL:078-845-9597(直) FAX:078-845-6940



ユネスコスクール一覧

区分	都道府県	市町村	学 校 名
幼稚園	北海道	室蘭市	清泉幼稚園
	奈良県	奈良市	富雄北幼稚園
	佐賀県	佐賀市	鳳鳴乃里幼稚園
小学校	北海道	石狩市	石狩市立生振小学校
	宮城県	角田市	角田市立東根小学校
	宮城県	栗原市	栗原市立高清水小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立水梨小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立浦島小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立大島小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立面瀬小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立鹿折小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立新城小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立中井小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立白山小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立階上小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立松岩小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立月立小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立唐桑小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立気仙沼小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立南気仙沼小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立九条小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立小原木小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立馬籠小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立大谷小学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立津谷小学校
	宮城県	白石市	白石市立白石第二小学校
	宮城県	白石市	白石市立白川小学校
	宮城県	仙台市	仙台市立中野小学校
	宮城県	仙台市	宮城教育大学附属小学校
	宮城県	富谷町	富谷町立日吉台小学校
	宮城県	丸森町	丸森町立金山小学校
	千葉県	市川市	市川市立中山小学校
	千葉県	市川市	市川市立稲越小学校
	千葉県	市川市	市川市立鶴指小学校
	埼玉県	熊谷市	熊谷市立久下小学校
	埼玉県	熊谷市	熊谷市立佐谷田小学校
	東京都	江東区	江東区立東雲小学校
	東京都	新宿区	新宿区立西戸山小学校
	東京都	練馬区	東京学芸大学附属大泉小学校
	東京都	小笠原村	小笠原小学校
	東京都	小笠原村	母島小学校
	東京都	調布市	調布市立布田小学校
	新潟県	十日町市	十日町市立飛渡第一小学校
	新潟県	下山市	新潟市立下山小学校
	富山県	富山市	富山市立中央小学校
	富山県	富山市	富山市立寒江小学校
	石川県	金沢市	金沢市立浅野川小学校
	石川県	金沢市	金沢市立朝日小学校
石川県	金沢市	金沢市立金石町小学校	
石川県	金沢市	金沢市立材木町小学校	
石川県	金沢市	金沢市立四十万小学校	

区分	都道府県	市町村	学 校 名
小 学 校	石川県	金沢市	金沢市立田上小学校
	石川県	金沢市	金沢市立戸板小学校
	石川県	金沢市	金沢市立野町小学校
	石川県	金沢市	金沢市立森山町小学校
	石川県	金沢市	金沢市立弥生小学校
	石川県	金沢市	金沢市立中央小学校
	石川県	金沢市	金沢市立花園小学校
	石川県	金沢市	金沢市立三馬小学校
	石川県	金沢市	金沢市立鞍月小学校
	石川県	金沢市	金沢市立味噌蔵町小学校
	石川県	金沢市	金沢市立三谷小学校
	石川県	金沢市	金沢市立長坂台小学校
	石川県	金沢市	金沢市立西小学校
	石川県	金沢市	金沢市立大野町小学校
	石川県	金沢市	金沢市立押野小学校
	石川県	金沢市	金沢市内川小学校
	石川県	金沢市	金沢市立湯桶小学校
	石川県	能美市	能美市立粟生小学校
	岐阜県	岐阜市	岐阜市立島小学校
	三重県	鈴鹿市	鈴鹿市立飯野小学校
	三重県	鈴鹿市	鈴鹿市立神戸小学校
	三重県	鈴鹿市	鈴鹿市立牧田小学校
	京都府	京都市	京都市立上賀茂小学校
	京都府	京都市	京都市立乾隆小学校
	大阪府	豊中市	豊中市立上野小学校
	大阪府	豊中市	豊中市立新田小学校
	大阪府	松原市	松原市立三宅小学校
	大阪府	松原市	松原市立惠我南小学校
	奈良県	奈良市	奈良市立飛鳥小学校
	奈良県	奈良市	奈良市立帯解小学校
奈良県	奈良市	奈良市立濟美小学校	
奈良県	奈良市	奈良市立佐保川小学校	
奈良県	奈良市	奈良市立椿井小学校	
奈良県	奈良市	奈良市立鳥見小学校	
奈良県	奈良市	奈良市立二名小学校	
奈良県	奈良市	奈良市立佐保小学校	
中 学 校	和歌山県	和歌山市	和歌山市立広瀬小学校
	和歌山県	田辺市	田辺市立三栖小学校
	広島県	大竹市	大竹市立栗谷小学校
	広島県	海田町	海田町立海田東小学校
	広島県	北広島町	北広島町立豊平東小学校
	広島県	広島市	広島大学附属小学校
	広島県	福山市	福山市立内海小学校
	北海道	手稲市	札幌市立手稲西中学校
	宮城県	岩沼市	岩沼市立岩沼中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立面瀬中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立気仙沼中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立鹿折中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立階上中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立新月中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立唐桑中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立大島中学校

区分	都道府県	市町村	学 校 名
中 学 校	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立条南中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立小原木中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立松岩中学校
	宮城県	気仙沼市	気仙沼市立大谷中学校
	宮城県	白石市	白石市立小原中学校
	宮城県	白石市	白石市立白川中学校
	宮城県	白石市	白石市立東中学校
	宮城県	白石市	白石市立南中学校
	宮城県	丸森町	丸森町立丸森東中学校
	秋田県	大仙市	大曲南中学校
	栃木県	宇都宮市	宇都宮市立一条中学校
	埼玉県	越谷市	越谷市立富士中学校
	静岡県	伊豆市	伊豆市立天城中学校
	新潟県	長岡市	長岡南中学校
	新潟県	新潟市	新潟市立巻東中学校
	新潟県	新潟市	新潟市立白新中学校
	富山県	富山市	富山大学人間発達科学部附属中学校
	石川県	金沢市	金沢市立紫錦台中学校
	石川県	金沢市	金沢市立泉中学校
	石川県	金沢市	金沢市立芝原中学校
	石川県	金沢市	金沢市立内川中学校
	三重県	鈴鹿市	鈴鹿市立神戸中学校
	三重県	鈴鹿市	鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校
	滋賀県	東近江市	東近江市立五個荘中学校
	大阪府	豊中市	豊中市立第十一中学校
	大阪府	松原市	松原市立松原第七中学校
	奈良県	奈良市	奈良教育大学附属中学校
	奈良県	奈良市	奈良市立興東中学校
	奈良県	奈良市	奈良市立月ヶ瀬中学校
	奈良県	奈良市	奈良市立三笠中学校
	奈良県	奈良市	奈良市柳生中学校
	奈良県	奈良市	奈良市立平城西中学校
	奈良県	奈良市	奈良市立二名中学校
	奈良県	奈良市	奈良市立都南中学校
	和歌山県	和歌山市	和歌山市立伏虎中学校
	広島県	大竹市	大竹市立栗谷中学校
	広島県	廿日市市	山陽女学園中等部
	広島県	三原市	如水館中学校
	山口県	周南市	周南市立太華中学校
	山口県	防府市	防府市立佐波中学校
中 高 一 貫 校	北海道	登別市	北海道登別明日中等教育学校
	茨城県	つくば市	茨城県立並木中等教育学校
	千葉県	千葉市	渋谷教育学園幕張中学・高等学校
	東京都	西東京市	武蔵野女子学院中学校・高等学校
	新潟県	燕市	燕中等教育学校
	愛知県	名古屋市	名古屋大学教育学部付属中・高等学校
	大阪府	大阪市	浪速中学校・高等学校
	奈良県	奈良市	奈良女子大学附属中等教育学校
	広島県	東広島市	広島県立広島中学・高等学校
	北海道	札幌市	市立札幌大通高等学校
高等 学校	北海道	室蘭市	海星学院高等学校
	北海道	清里町	北海道清里高等学校

区分	都道府県	市町村	学 校 名
高 等 学 校	岩手県	盛岡市	盛岡中央高等学校
	宮城県	気仙沼市	宮城県気仙沼高等学校
	宮城県	気仙沼市	宮城県気仙沼西高等学校
	宮城県	仙台市	宮城県第二女子高等学校
	秋田県	秋田市	秋田商業高等学校
	秋田県	秋田市	明桜高等学校
	千葉県	市原市	市原中央高等学校
	千葉県	市川市	市川西高等学校
	埼玉県	伊奈町	国際学院高等学校
	東京都	世田谷区	筑波大学附属駒場高等学校
	東京都	港区	東京都立三田高等学校
	東京都	渋谷区	渋谷教育学園渋谷高等学校
	東京都	八王子市	八王子高等学校
	神奈川県	海老名市	神奈川県立有馬高等学校
	新潟県	南魚沼市	国際情報高等学校
	愛知県	日進市	中部大学第一高等学校
	大阪府	池田市	大阪教育大学附属高等学校池田校舎
	大阪府	大阪市	大阪府立住吉高等学校
	大阪府	大阪市	大阪府立北淀高等学校
	大阪府	河内長野市	大阪府立長野高等学校
	大阪府	高石市	羽衣学園高等学校
	大阪府	松原市	大阪府立松原高等学校
	大阪府	能勢町	大阪府立能勢高等学校
	奈良県	斑鳩町	法隆寺国際高等学校
	兵庫県	神戸市	神戸市立葺合高等学校
	和歌山県	串本町	和歌山県立古座高等学校
	岡山県	矢掛町	岡山県立矢掛高校
	岡山県	笠岡市	岡山龍谷高等学校
	岡山県	岡山市	岡山県立岡山一宮高等学校
	広島県	呉市	呉三津田高等学校
	広島県	廿日市市	山陽女学園高等部
	広島県	広島市	広島大学附属高等学校
	広島県	広島市	広島国泰寺高等学校
	広島県	福山市	福山誠之館高等学校
	広島県	三次市	広島県立三次高等学校
	広島県	広島市	広島県立広島井口高等学校
	広島県	広島市	広島県立安芸府中高等学校
	広島県	広島市	広島県立尾道北高等学校
	広島県	三原市	如水館高等学校
	愛媛県	新居浜市	新居浜南高等学校
	福岡県	筑紫野市	福岡県立武蔵台高等学校
	福岡県	福岡市	福岡県立城南高等学校
大 学	宮城県	仙台市	国立大学法人宮城教育大学
	東京都	町田市	玉川大学（教育学部）
	三重県	津市	国立大学法人三重大学
	奈良県	奈良市	国立大学法人奈良教育大学
	東京都	練馬区	練馬和光保育園
そ の 他	北海道	斜里町	斜里町立ウトロ小中学校
	東京都	足立区	興本扇学園
	奈良県	奈良市	奈良市田原小中学校
京 都 府	京都府	京田辺市	京田辺シュタイナー学校

持続発展教育(ESD)大賞

Education for Sustainable Development Award

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、本年、持続発展教育（ESD：Education for Sustainable Development）の取り組みを実践する学校を奨励する「持続発展教育（ESD）大賞」を設立いたしました。

本事業は、全国の小・中・高等学校から実践的研究事例を募り、持続発展教育に該当する実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続発展教育の発展に寄与することを目指し、実践するものです。本大会閉会式にて受賞校の表彰式を行います。また、受賞内容はESDの実践教材としてまとめ、年度末までに大会参加者へ配布させていただく予定です。

なお、本年度の持続発展教育（ESD）大賞には、カシオ計算機株式会社様、ソーケングループ様、P & G ジャパン株式会社様、三菱東京UFJ銀行様よりご協力いただいております。

第1回持続発展教育(ESD)大賞 受賞校

持続発展教育(ESD)大賞

東京都江東区立東雲小学校

ユネスコスクール最優秀賞

宮城県気仙沼市立唐桑中学校

小学校賞

奈良県奈良市立済美小学校

中学校賞

静岡県伊豆市立天城中学校

高等学校賞

岡山県立矢掛高等学校

協力企業一覧

カシオ計算機株式会社

サンウエーブリフォームショップR&B

積水ハウス株式会社

全国農業協同組合連合会

ソーケングループ

ダノンウォーターズオブジャパン株式会社

P&Gジャパン株式会社

三菱東京UFJ銀行

第2回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(E S D)研究大会 抄録集

発行日：平成22年10月30日

発行：N P O 法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒110-0005 東京都台東区上野3-17-7

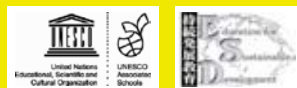
Tel：03-3832-3581

Fax：03-3832-3570

E-mail：info@jp-esd.org



「ESDで育てる“生きる力”」



この大会は平成22年度「日本／ユネスコ パートナースhip事業」として、
文部科学省の委託を受け実施するものです。